

ある(註一)。マルクスも、資本主義的生産力の發展における自由競争の役割について次の如く説明してゐる。「資本主義的生産の發展は一つの企業に投下された資本の不斷の増嵩を必然性たらしめ、そして競争は資本主義的生産様式の内在的法則を外的強制的法則として各々の個別的資本家に押しつける。それは彼を強ひて、彼の資本を維持するためにそれを不斷に擴張させる、そして彼はただ累進的蓄積によつてのみ資本を擴張し得るのである」(註二)。このやうにして資本主義的生産においては擴張再生産——資本の蓄積——が必然的であり、それによつて生産力も生産關係も、従つて兩者の矛盾もますます擴張的に再生産される。生産力の發展はここでは機械の改良、それに関連してますます多くの自然的富源の開發、擴張再生産に要する労働者數の擴張再生産(多數人口のプロレタリア化による)の中に表現され、しかもこの發展において資本家と労働者の間、並びに資本家の手にある技術と労働者の間のアンタゴニズムも擴張的に再生産される。

(註一)「反デューリング論」第三篇第二章

(註二)「資本論」第一卷第二十二章

だが資本家相互の自由競争の結果、弱小なものが倒れて強者が残るとすれば、後者の手には社會的富がますます集中・集積し、更にそれが擴張的に再生産され、そしてかやうな過程そのものが擴張的に反覆、再生産されて、資本主義は獨占の段階に入り込む。この段階においてはすでに技術進歩において停滯的傾向があらはれ、同時に全體としての労働者階級はますますミゼラブルな生活條件の下に置かれることとなる。獨占資本主義の時代の所有關係の下においては、技術の發展が相對的に停滯するばかりでなく、生産力の最重要な要素たる労働力は直接的生産過程の圏外に

大量的に締め出される（産業豫備軍として）。特にその一般的クリーゼの時代には、現存する生産設備・技術さへも慢性的に長期にわたつてその何パーセントかは休止状態に置かれ、未曾有の大量の労働力が生産に利用されず無駄にされ、荒廢に委ねられてゐる。云ひかへれば生産力の發展は獨占資本主義、就中その現段階においてはすでに阻止され、生産關係は生産力の桎梏となり、それとコンフリクトするに至つてゐる。

資本主義的生産力の發展におけるこのやうな事實は、資本家の意志から獨立な資本主義的生産關係・所有關係によつて制約されてゐるものである。資本家の利殖慾は資本主義的生産の本質の觀念的反映に外ならず、資本家は「人格化された資本」（マルクス）に外ならない。生産・再生産、生産力の運動は資本家の意志から獨立な、客觀的に存在する歴史的に特殊な合法則性に從つて遂行されるのである。

かくて吾々は、資本主義的生産關係は生産力の發展の歴史的結果として、社會的生産の組織に迄到達した生産力の發展水準によつて規定されてゐ乍らも、それに照應するものとして生産力の發展法則の歴史的に特殊な質を制約し、生産力の一層の前進の促進要素となつたといふこと、だがこの生産關係を社會的條件として生産力が或る程度に迄發展するや、生産關係にもそれに應じて新しい特徴——獨占——が從來の特徴の基礎の上に、且つ後者と並んで、發展し、それと共に生産關係は生産力の發展の桎梏に轉化したといふこと、を明白に見る。

かくて亦、社會發展の基礎を社會の自然との間の外的均衡、前者の後者に對する「適應」の中に見出したブハリーンが、生産力の運動、再生産を生産關係から切離し、如何なる具體的な歴史的な特殊法則をも捨象した空虚な再生産、原因を捨象した再生産の外形、を叙述してゐるといふことも偶然でないのを知ることが出来る。「いま、何らかの原

因、の、た、め、に、同一量の必要生産物が全労働時間を費さずとも、ただその半分を費しただけで獲られるやうになつたと假定する。……さうなると、この社會では、以前の労働時間の丁度半分だけが解放される。そこで、この社會は、解放された時間を新たな生産部門に、即ち新たな道具の製出、新たな原料の獲得等々に、そして次に若干の種類のもの「精神的労働」に、費すことが出来る」(註一)。ブハーリンのこれらの言葉において、生産力の發展、擴張再生産が、その社會的條件——生産關係——抜きに、全く抽象的に考察されてゐるといふことは、あらゆる社會構成に通有な再生産の形式を見出さうとする彼のボグダーノフ的社會學的「概念スコラ學」と結びついてゐるものである。かくて例へば彼は、ソヴェート政權成立當初の「プロレタリアートの當面する課題は、大體において、形式上では、即ち過程の社會的内容から獨立にこれをみれば、擴張された否定的再生産の際におけるブルジョアジーにとつてと同一である、即ちすべての資源を節約し、それを計畫的に利用し、可能なる集中を最大限にすることである」(註二)杯と云つて、二つの社會構成、經濟體系における再生産の法則の中に形式上同一な内容を見出し、非歴史的なもの、社會構成の質に對して中立的なものとしての技術的過程を設定しようとする。彼がここで荒廢せる生産力の恢復に關するソヴェート労働者階級の任務を云爲するに當つて、生産關係の變更、労働者のベフライウングによつてもたらされる新しい労働規律の創造、労働の昂揚を全く念頭に置いてゐないことは特徴的である。

(註一) 「唯物史觀」白揚社版一八七頁(傍點は筆者)

(註二) 「轉形期經濟學」(傍點はレーニンがアンダーラインした部分)

かやうに生産力の運動を生産關係から切離して考察する見地は、元來、生産力の自動的、生長の見地であり、生産力

の發展における生産關係の役割の相對的積極性の否定の見地である。だからブハーリンがソヴェート農村における新しい生産關係の創造——コルホズ化、階級としてのクラークの清算——の積極的遂行を必要と認めず、ソシヤリズムへのクラークの自生的轉生の理論を提唱したのは故なきことではない。

然るに、生産力の運動はただ生産關係との統一、矛盾——矛盾を内包する統一——によつてのみ行はれ、この矛盾において生産關係が生産力に照應するときにはそれを前進せしめる契機となり、逆に照應しなくなつたときには生産力の發展の桎梏となり、かくて結局において廢棄されるといふことは、生産關係が生産力によつて規定されるとは云ひながら、否、正に規定されるが故にこそ、同時に生産力の運動に對して相對的に積極的な役割を演ずるものであつて、決して生産力の運動の單なる受動的結果ではないといふことに外ならない。「生産力と生産關係の概念の辯證法」(マルクス)、その限界が規定され、現實の差別を止揚しないところの辯證法こそ、史的客觀主義者の把握しえないところのものである。スハーノフやカウツキー、ヴァンダーヴェルデ等は、生産力は自動的に生長し、生産關係の變化はその單なる受動的結果であると思はす經濟的唯物論や客觀主義を史的唯物論と混同し、ロシヤにおける生産力の發展水準の低さを援用して「十月」に反對した。彼等は生産力のかかる低い發展水準を曳き上げるためには、何よりも先づそれに相應の新しい社會的條件、新しい生産關係の創出が必要だといふことを理解しなかつた。彼等は實にこの歴史の辯證法を理解しなかつた一事を以つても、辯證法的唯物論者たるの資格を失つたのである。

ところで新しい生産關係の創出はやはりそれに必要な生産力の一定の成熟を前提とする。低い生産力水準の上に高度の生産關係をやたらに造出すことは許されない。だがここで最も重要なことは、或る國における生産力が一定の新

しい生産關係の實現を可能ならしめる迄に生長してゐるかどうかの問題は、一般に認識の眞理性の規準がプラクシスであるやうに、結局においてプラクシスの規準によつて解決されるといふことである。だから例へばその國の生産力が他國に比して相對的に低水準に在るといふことだけでは、未だ新しい生産關係の出現のための生産力の未成熟性を證明するものではない。現代社會においてはこの問題に解決を與へるものは先進的階級のプラクシスである。で、例へば、舊ロシアのやうな比較的後れた國においても、種々の一般的小さい特殊の條件の獨自な結合によつて好都合な客觀的事態が造り出され、かかるチャンスがすかさず利用されて新しい社會的關係が設定され、しかもそれが維持・發展せしめられてゆくとすれば、即ちすでにプラクシスの上でここにおいても生産力は餘りに低くはなかつたといふことが立證されるわけである。つまり、プラクシスによる檢證をまたずしては、生産力のかの成熟した水準が「如何なるものであるかは何人も語り得ないのである」。これはレーニンがスハーノフ批判において強調した注目すべき思想である。この場合プラクシスといつてもその主體はもちろん労働力の所有者達のことであるから、かかるプラクシスにおいて初めて生産力のあるこれの水準と一定の新しい生産關係の可能性の問題が解決されるといふことは、一般に、生産力と生産關係のコンフリクトをば、生産力の發展の利益において全生産力を代表して解決するところのフィジッシュな力が労働力の所有者達によつて提供される、といふ事實から歸結される。

生産力と生産關係の辯證法的交互作用、生産關係の相對的積極性、生産力と生産關係の交互作用における労働力の所有者達の積極的役割——これらのものの客觀主義的歪曲は、自然主義、經濟的唯物論から來るものである。そしてそれは、唯物史觀に容易に影響し、浸透するところの、従つてそれだけに批判されねばならぬところの一大潮流をな

してゐる。

第四節 各種の社會經濟的構成

社會經濟的構成の一般概念

歴史は、その固有な内在的な、そして人間の意志から獨立な客觀的な發展法則に従つて發展し、この過程において、一つの社會經濟的構成は一定の生長を遂げた後、他の、新たに發生する社會經濟的構成にとつて代はられる。だから歴史においては客觀的合法則性が支配し、各種の社會構成は客觀的に實在したもので、又は現に實在するものであつて、單なる認識上の目的で構成される範疇としての「型」の如きものではなく、歴史的に相繼起する、相互に異なる實在的な型である。そして各々の同じ型の社會構成の下では同じ法則が支配し、同じ過程が反覆される。かういふ見解によつて唯物史觀は觀念論的な歴史哲學や社會學の弱點を克服する。

同時に唯物史觀は、社會經濟的構成をもつて生産關係の總體から成立するものと見做し、この生産關係の質の特徴付けを生産手段の分配によつて規定される所有關係の中に見出すものであるから、それは當然に、所有關係に従つて生産様式を捨象した生産技術上および分業上の關係を生産關係なりとする見地や、かかる關係の相異に基いて社會經濟的構成の差別、従つて歴史上の時代區分を行ふ自然主義的、機械論的見地から、區別されなければならない。この種の機械論的見解の代表者として知られてゐるのはボグダーノフとドゥプロフスキーである。ボグダーノフは社會發展の全歴史を三つの基本的な型に分ける。第一の型は「零細自然經濟」で、それは原始氏族コンミュニズム、權威制

氏族共同體、封建制に細分され、第二は交換經濟の型で、それは更に過渡的形態としての奴隸制および農奴制と、小ブルジョアの構成、家内資本主義體制、マニユファクチュア型の産業資本主義、機械制資本主義に分たれ、第三の型は合同自然經濟（コレクチヴィズム）である（ラリツエウイチ編「史的唯物論」による）。ドゥプロフスキーは「基本的生産様式」として原始社會の經濟、家父長制經濟、奴隸制經濟、農奴制經濟、小生産者の經濟、資本主義經濟、資本主義からソシヤリズムへの過渡期の經濟、ソシヤリズム經濟、世界コンミュニズム時代の經濟を列擧する。これらの分類が何ら史的唯物論における社會經濟的構成の見地に立つてゐないことは、封建制と農奴制を異る範疇としたり、奴隸制や封建制の下でも存在する商品生産を特殊な經濟時代・社會經濟的構成と見做したり、過渡期を特殊な社會構成へ獨立させたりしてゐるのを見ても明白である。

歴史上の時代區分、種々の社會經濟的構成の區分は所有關係、生産様式を指標としてなされなければならない。

だが現實の社會經濟的構成は決して「理想型」的に純粹なものではない。例へば封建社會の内部には從屬的なものとして前階級社會の生産關係や奴隸所有が殘存すると共に、やがて後には資本主義的生產關係が生成する。また資本主義社會の内部には多かれ少なかれ封建社會の遺制や、また往々にして奴隸制の遺物が殘存する。このやうに、一定の社會經濟的構成の質を規定する生産關係——その構成における支配的な生産關係——に從屬して、その社會構成の内部に存在する所の、舊い社會構成の遺制や、生成途上の新しい質の生産關係の體系は、ロシヤ語で特にウクラード（Uklad）と呼ばれる。このウクラードの存在によつて社會經濟的構成は何らかのモディフィケーションを受けるとはさへ、しかしそれは單なるウクラードがその社會の發展において決定的な役割を演じるといふことを意味しない。

かかる役割を演じるところの生産関係はもはや單なるウクライドたることを止める。何となれば社會經濟的構成とは元來、他のウクライドを從屬せしめる支配的なウクライドのことだからである。

現在までの歴史上に見出される社會經濟的構成は、原始コンミニズム、奴隸制（又は古代的構成）、封建制、資本主義およびソヴェト的構成である。これらのものについて若干の説明を加へよう。

原始コンミ
ユニズム

これは所謂有史以前の極めて長期にわたる社會經濟的構成である。原始社會の研究はモルガンの著書「古代社會」（一八七七年）によつて一大進歩を齎らされた。エンゲルスはモルガンに依據して、原始

社會の發展、原始コンミユニズムの發展を次のやうに段階付けてゐる（「家族、私有財産および國家の起源」參照）。

(A) 蒙昧 (Wild)

(一) 下期——人類の幼年期、猿に類したもものから人間への轉化の時代。

(二) 中期——魚類の食用と火の使用に始まり、磨きをかけない石器（古石器）の製出、棍棒および投槍の發明がこの時代に屬する。それと共に獸肉も時々食用にされた。

(三) 上期——弓矢の發明をもつて始まる。狩獵が正規の生業となり、磨製石器（新石器）、その他若干の道具、獨木舟等が造られ、定住の端緒があらはれる。

(B) 野蠻 (Barbary)

(一) 下期——土器の使用から始まる。

(二) 中期——東大陸では家畜の馴養、西大陸では灌漑による食用植物の栽培と石造建築をもつて始まる。これは兩大陸の自

然的條件の相異によつて制約されてゐるが、しかしやがてこの時期において東大陸にも植物栽培は起り、西大陸にも動物の馴養が始まる（メキシコ人の七面鳥、ペルー人の駱馬）。西大陸はスペイン人の征服當時までこの段階にとどまつてゐた。

(三) 上期——鐵器の製作と共に始まり、農業の進歩、道具の發達による手工業の展開、城壁を環らせた都市の發生を経て、文字の發明とその文献的記録への利用とによつて文明期に移行する。

エンゲルスはモルガンのこの區分を概括して、蒙昧は主として出來合ひの自然の産物を獲得する時代で、労働手段はこの獲得の補助手段であり、野蠻は牧畜および耕作の知識を得る時代、即ち人間の労働によつて自然物の生産を高める方法を學ぶ時代であり、次の、文明の時代は自然物の一層の加工、本來の工業および技術を學ぶ時代である、と規定した。

原始社會においては最初階級、私有財産は存在しない。一切の生産手段は共同體によつて所有される。この共同體は最初はいはゆるホルド（群團）であり、次に蒙昧の中期から氏族制が發生し、野蠻の下期において全盛時代を現出する。氏族制の發展は母權制の成立を制約した。

原始社會の所有關係・生産關係は當時の労働手段の極めて低い發展段階においては生産力の發展の強力な槓杆であつた。それは協業——勿論、單純協業——による労働生産性の上昇を制約し、生産力の發展の契機として働いた。だが生産力の發展の結果、野蠻の中期に牧畜が起り、牧人種族が出現すると共に、牧人種族と他の種族との間に氏族長を通して交換が規則的に行はれ始め、交換は更に生産力の一層の發展を促進した。このことは「人間の労働力に對して、その生計に必要なよりも大なる生産物を産出する能力を興へた。同時にそれは、氏族、世帯共同體又は單一家族

の各成員の負擔する日々の労働量を増大した。」かやうに、一方、餘剩労働の可能性と、他方、より多くの労働力に對する需要とは、奴隸の出現をもたらしめた。奴隸は初めは戦争の俘虜であり、後に私有財産の發展につれて負債の支拂能力なき者も奴隸に轉化した。かくてエンゲルスは牧人種族の出現をもつて「最初の大なる社會的分業」と呼び、ここに奴隸所有の根據を見出してゐる。

氏族間の交換は氏族内部における交換を發生せしめ、かくて發展した生産力は共同的生产の代りに個別的生產を可能ならしめ、それと共に氏族又は種族の財産だつた多くの生産手段は個々の家族長の所有に移される。氏族制の最初の割目を成した家父長的家族が成立し、母權的家族は消滅する。これは、婦人の労働が、主として家内労働に局限され、生産において重要性を有しなくなつたがためである。土地が共有で、その他の大多數の生産手段が家族的所有となつてゐるところの農業共同體は、かかる家父長的家族の集合である。

野蠻の上期に入ると共に、「第二の大なる分業」、即ち農業からの手工業の分離が行はれ、交換のための生産が、従つてまた商業が發展し、「富者と貧者の差別が自由人と奴隸の差別と並んであらはれる」(エンゲルス)。

その結果、氏族制は崩壊し、奴隸制的社會構成があらはれ、その基礎の上に國家が形成される。共同所有的生产關係によつてその發展を制約された生産力は、分業、交換の發展と共に、やがて舊來の生産關係と兩立しなくなり、私有關係を發展せしめ、終に原始コンミニズムを解體させたのである。

奴隸制

原始社會の廢墟の上に發生した新しい社會經濟的構成は歴史上最初の階級的社會構成であり、古代國家はこれを「現實的基礎」とするものであつた。奴隸制はすでに見たやうに氏族共同體の中にウクライド

として發生したものであるが、一層の發展の結果、この共同體の殻を破つて自らを社會經濟的構成に轉化させた。それと共に今や奴隸とその主人との間のアンタゴニズムが全社會構成の基礎となる。

奴隸制は古代のギリシヤおよびローマにおいて典型的に發展した。ここでは奴隸労働は家父長的家族の労働の補足物から、生産における決定的な要素にまで發展し、奴隸所有者はもはや労働を輕蔑する完全な寄食者となつた。しかし乍ら如何なる國においても、奴隸労働が最初の *Ausbeutung* の形式だつたといふことは疑のない所である。一般的に見て、古代國家の發生に當つて自らを治者階級へと編成した人々は、舊社會における富者・奴隸所有者であつた。

古代においては外ならない奴隸制が *Ausbeutung* の基本的形式であつたことは、當時の技術水準によつて説明される。低い技術水準の下では、労働過程において労働力が直接に演じる役割の比重が、技術のそれに比して著しく大きく、それだけにまた労働生産性も低い。そこで労働力は直接に他人の所有の對象となり、その再生産が不可能になる迄に労働を強制されるのである。

多數奴隸の所有者の行ふ大規模生産と、氏族制の崩壞によつて獨立した多數の家父長的家族——後には一夫一婦制の家族——の小規模な個別的生産とは互ひに矛盾し、前者は安價な労働力、強行的労働、單純協業の強味や、租税、戦争の負擔等をもつて後者を壓迫し、後者は必然的に零落する。奴隸所有者の手への餘剰生産物の大量的集積は商業を發展させ、商業は更に奴隸經濟の發展を促進する。零落した小生産者——自由な農民と手工業者——は或はルムペン團を形成したり、或は商業資本と共に發展する高利貸資本に縛られて債務奴隸となる。

奴隸制社會の基本的矛盾は奴隸所有者と奴隸の間の矛盾であり、そこから奴隸所有者と小生産者との間の矛盾が派

生ずる。奴隷労働の飽くことなき Ausbeutung を通しての小生産の壓迫と、租税その他の負擔の加重とによる一般人民の窮乏が、遂に奴隷労働の生産物のための市場を狹隘ならしめる迄になり、奴隷制がすでに利益をもたらさなくなつたとき、それは奴隷（および小生産者）の Klassenkampf に對して持ちこたへられないものとなつた。

封建制

普通に西ヨーロッパの封建制はローマ帝國に對する「蠻族」（ゲルマン人）の征服によつて發生したと見做される。だが實際には征服そのものは決して新しい生産様式を産出しない。征服の後に新しい生産様式が樹立されるためには、そのやうな生産様式が征服者の側か被征服者の側に豫め成長しつつあることが必要である。ローマにおいてはその末期に、奴隷所有者の大私有地（ラチフンデウム）は奴隷の單純協業による大規模農業から小規模な耕作に移され、細分された土地は地主に對して地代を納める非自由な農民（自由農民や奴隷から轉化せるもの）によつて耕作され始めた。一言でいへば封建的土地所有。封建的生产關係が生長した。この基礎に加へて、野蠻上期にあつたゲルマン人の軍團組織がヒエラルヒー的な封建的土地所有の創出を容易ならしめた。

ローマの奴隷制は貨幣Ⅱ高利貸資本の異常な生長をもつた自然經濟であつた。ところでこの奴隷制の解體が「市場の消滅」（エンゲルス）に關聯してゐる限り、その廢墟の上に發生した封建制は、自然經濟の側への一層の後退であつた。封建制は、何處においても、自然經濟を基礎とするもので、その生産關係の核心は領主・地主の大土地所有と、農奴又は農奴的農民によるこの土地の零細耕作のうちに表現される。

奴隷制と異つて、封建制の下では直接的生産者たる農民は直接に所有されるのでなく、彼は農業要具の所有者でさへある。だがもちろんそれは彼が自由民であることを意味しない。封建制下の農民は領主・地主に直接に所有されな

いとしても、やはり後者の土地に經濟外強制をもつて括り付けられるところの非自由民である。土地への農民のこの緊縛、地主・領主への農民のこの隷屬は農奴制において典型的にあらはれる。農奴制はボグダーノフやドゥプロフスキーの云ふ如く封建制と異つたもの、別な段階、別な社會經濟的構成をあらはすものでなく、封建制の諸特徴を典型的に示してゐるものに外ならない。

レーニンは資本主義に對する農奴制の特徴を次のやうに説明する。「第一に、農奴制經濟は自然經濟であり、資本主義經濟は貨幣經濟である。第二に、*Ausbeutung* の手段は農奴制經濟においては土地への勞役者の緊縛、彼への土地の割當であり、資本主義經濟においては土地からの勞役者の解放である。收入（即ち餘剰生産物）の獲得のためには、農奴所有者・地主は自己の土地に割當地、農具、家畜を有する農民を持たなければならない。……資本家は收入（利潤）の獲得のためには、正に自由な労働市場で自己の労働力を賣らなければならない。……土地無き、馬無き、經營無き勞役者をこそ眼前に持たなければならない。第三に、土地を割當てられた農民は地主に人身的に依存しなければならぬ、何故なら土地を與へられた彼は強制による以外には徭役労働に行かないからである。ここには經濟體制は『經濟外強制』、農奴制、法律上の隷屬、權利不充分等々を産出する。反對に、『理想的』資本主義は自由市場における有産者とプロレタリアートとの契約の完全な自由である」（註）。即ち、自然經濟であること、農民が一揃ひの生産手段を所有し、地主の土地を割當てられてゐること、經濟外強制によつて農民の隷屬、地主の收取者的地位が維持されることが、封建制の特色である。

（註）「十九世紀末ロシアの農業問題」第二章

典型的な自然經濟の下では一般に家父長的家族とか、農業共同體とか、封建地主の所有地とかいふやうな、互ひに小宇宙的に獨立した經濟的單位の中で生活に必要な一切のものは生産され、商品でなくて使用價值の生産が支配的である。そこでは従つて手工業は農業から獨立せず、農民の消費する手工業生産物は農民自身によつてか、或は未だ農業から分離してゐない農村手工業者によつて生産される。併しながら生産力の發展——徐々ではあるが——と共に分業が發展し、農業に従屬してゐた手工業は漸次にそれから分離し、獨立し、それにつれて都市が農村から分離する。都市の住民を構成する主要なものは、商人、高利貸、手工業の親方、職人、徒弟、日雇労働者であり、日本の徳川封建制においては都市は多く（大阪や堺やその他若干のマニユファクチュア都市は別だが）領主とその家臣團の居住する城下に形成された。都市における手工業や商業・高利貸資本の生長は封建制に解體的作用を及ぼすものであるが、しかし未だそれだけでは、即ち商業・高利貸資本が産業資本に轉化しない限りは、封建的自然經濟を覆へすことは出來ない。封建時代の都市は未だに自然經濟が優越な農業を背景として立つてゐるものである。

従つて土地を所有する領主・地主と耕作者たる農民の關係が、封建制の基礎を、それ故にまた基礎的矛盾を成してゐる。この關係は經濟的には封建的地代の中に表現される。マルクスは封建的地代の形態として、労働地代、現物地代、貨幣地代を擧げる。何れも農民の全餘剩労働を吸収することには變りはない。だが封建制下の農民は、日本封建制の特に末期の場合のやうに自己の必要労働の分まで收取され、自己の生活の再生産さへ出來ないやうな状態に置かれない限り、奴隸と異つて、生産性を上昇させようとする衝動を持つ。何故なら労働地代の場合なら自己の割當地における労働の強化によつて、また一定の率又は一定額の現物地代や貨幣地代の場合ならば全收穫高の増加によつて、

彼は富み得るからである。だが他面において、領主の收取と小規模經營は封建時代における農業生産力の發展を阻止する有力な要因として作用した。

貨幣地代は商品生産の發展を前提とし、またこのやうな貨幣關係の發展は耕作農民の間から農業資本家の發生を可能ならしめる。といつても、貨幣地代そのものは何ら資本主義的農業の發生の必然性を與へない。特に日本において明治政府がやつたやうに、工業部面に投じられる資本の原始的蓄積の目的で、必要労働の生産物の一部分まで喰ひ込んだ現物地代の一部分が地租の名において貨幣化されるが如き場合には、耕作農民の間から資本主義的農業經營者が出て來ないことは勿論である。

地主に地代の取得を保證するものは封建的政治體制によつて保證される經濟外強制である。簡單にいへば經濟外強制は封建的治者階級の武裝勢力に支へられてゐるものである。だから地代の引下げはただ農民の鬭争の結果としてのみもたらされた。ところで封建的治者階級の内部的編成はヒエラルヒーの原理によつてゐて、各地主の勢力は彼等の所有する土地の大小——或ひは農奴數の多少——によつて規定され、小なる地主はより大なる地主に臣従して自己の地位を保證し、後者は更に大なる地主に隸屬する。封建的モナルヒー——例へば日本の幕府——は封建時代の最大の土地所有者である。日本では戰國時代の強食弱肉の過程において、農村の自己の領地に居住してゐた多數の地主・土豪は或は大土豪に倒され、後に藩主となつた後者に隸従して、その家臣となり、知行所を離れ、城下に定住するか、或は藩主に服従して郷士として農村に存在するか、或は百姓の列に落されることとなつた。そこで農民は多くの場合幕府および幕府を頭に戴く藩主・巨大土地所有者（大名、小名、陪臣等）に直接に支配され、後者はその家臣團の老

大な武装勢力をもつて、商業Ⅱ高利貸資本の生長と共に益々増大する收取を強行したのであつた。かかる收取、かかる Ausbeutung が如何に農民の生活そのものの再生産をも不可能ならしめたかは、特に徳川時代の後期に普遍的現象となつた逃散、凶荒による餓死、農民一揆等々がこれを示してゐる。

封建制の基本的な矛盾は階級的には地主・領主と農民との間のそれであるから、封建制の解體において基本的に重要な意義を持つのは農民の闘争である。ところで封建的土地所有の清掃は農奴的農民を自由な獨立小農民に轉化させるといふ意味で、ブルジョア民主主義の實現を意味する。しかしブルジョアの秩序の樹立はブルジョアの一定の生長を前提とするものであるから、農民は單獨では封建制を打倒し得ないものである。それにしても、ブルジョア民主主義がどれだけ徹底するかといふことは、この運動において物理的力の供給者となる農民と都市労働者がどれだけ積極的に活動したかによつて規定されるといふことを銘記しなければならない。

前資本主義的な階級的社會構成は以上述べた奴隸制的構成と封建的構成に限られる。ところでマルクスが諸所で、アジア的生產様式といふ言葉を使つてゐるところから、このアジア的とは何を意味するか、それは如何なる社會構成の特徴を意味するかといふことが問題となつてゐる。アジア的生產様式を奴隸制のおよび封建的構成と別箇な、それと並立する獨立な社會經濟的構成と見做すことの誤謬は充分に明白である。何故ならアジアの歴史も奴隸制および封建制以外の階級的社會構成の存在を示さないからである。尤も、奴隸制がアジア諸國で單なるウクライドから社會構成にまで發展し、古代國家の基礎となつたといふことは未だ具體的研究によつて證明されてゐない。だが同時に、アジ

ア諸國の古代的社會構成をば奴隸制を副次的なものとする封建的構成と斷定し去る見解も無論公認的なものとなつてゐない。だが何れにしても、奴隸制が階級的アンタゴニズムの最初の形態であつたといふことはアジアにおいても變りはない。マルクス、エンゲルスは、西ヨーロッパの資本主義侵入以前の支那やインドについて、家父長的家族の勞働の補足物たる段階における奴隸所有がギリシヤやローマのやうに老大な數の奴隸の協業による大生産のために驅逐されるに至らないで繁榮したこと、従つて家父長的家族形態が止揚せられず、それに關聯して家父長的家族を構成單位とする農業共同體が長く殘存したことを指摘し、アジア諸國における生産力の發展の停滯性やその特徴的な專制的政治形態の經濟的構造上の基礎をここに見出した。このやうな特徴は、無論、特殊な社會經濟的構成を成立せしめな

い。農業共同體は野蠻中期に發生し、氏族制の解體後に普遍的なものとなつた家父長的家族と不可分のもので、それは到る所において、程度の相異や期間の相異こそあれ、古代社會にも封建社會にも殘存した。だからそれは特殊な社會構成であり得ず、アジア諸國におけるその強固な殘存は、ただそれらの諸國の前資本主義的な階級的社會構成に若干の特徴、ニュアンスを賦與したにすぎない、といふべきであらう。アジア的生產様式なるものは、このやうな意味に理解さるべきであらう(註)。

(註) 尙ほこの問題に關する種々の意見とその検討については相川春喜氏「歴史科學の方法論」第二篇參照

資本主義

封建社會において、商品生産が發展するにつれて、資本主義的生產關係がその中にウクライドとして形成され、それは一定の程度まで發展するや、封建制を没落せしめて新たな社會經濟的構成に飛躍的に轉化する。

資本主義的生産は生産手段の所有者と生産手段無き労働者の存在を前提とするもので、その發生は、商品生産が労働力をも商品たらしめるといふ段階にまで到達するとき可能となる。資本主義に特有な社會的生産は、一人の資本家の所有する生産手段をもつて、多數の賃銀労働者が生産に従事するといふことにおいて成立するのである。

資本主義的生産は初め商業資本の支配下にある手工業から發生する。その發展の第一段階は小商品生産＝手工業であり、第二段階はマニユファクチュアであり、第三段階は大工業である。

第一段階たる手工業の萌芽は「家族的協業」であるが、それは資本主義的なものとしては勿論賃銀労働者を前提とする。従つて封建的に統制された都市手工業が嚴重なツンフト規則に縛られてゐるところでは、賃労働に基づく手工業は最初はむしろ農村において發生する。ところで農民の商品生産は小規模であり散在的であるために、原料の買入れや製品の販賣において特殊な便宜を有する商人・買占人に依存する。この依存には、買占人が小商品生産者の製品を獨占的に買ひ取るといふところから、資本主義的家内労働とは、買占人が小工業者に原料を配給して、一定の賃銀で自宅で加工させる關係を指すもので、ここでは買占人の商業資本は産業資本に移行し、直接的生産者がこの手工業の經營者であらうと、彼に雇はれる賃銀労働者であらうと、直接的生産者は何れにしても事實上の賃銀労働者である。

小工業はその小規模經營の故に決してツンフト的の手工業に對して決定的に優位を占めることは出來ない。ところが相當數の労働者を擁する作業場で分業が行はれ出すと共に、單純協業に基く小工業は終りを告げ、マニユファクチュアが發生する。他方では、買占人が今迄直接的生産者にやらせてゐた作業の中の一部を自分の作業場で賃銀労働者

にやらせ、それに關聯して分業に基く協業が起るときにも、マニユファクチュア（勿論、資本主義的マニユファクチュア。——マニユファクチュアとは分業に基く協業だから、資本主義固有のものでなく、大生産が行はれた奴隷經濟においても不完全ではあるが存在した。しかしそれが普遍的現象となつたのは資本主義勃興期である。そこで、本書では資本主義的マニユファクチュアのことを單にマニファクチュアと書いた）は發生する。マニユファクチュアは手工業的な技術を基礎としてゐるとはいへ、社會的生産に向つての大きな前進である。それは小工業の如く商人資本に全く隸屬するのではなく、産業資本を生長させる。

「商業資本と産業資本の最も緊密な結合はマニユファクチュアの最も特徴的な特質の一つである」（註）。マニユファクチュアにおいて産業資本が商業資本と密接に結びつくといふことは、マニユファクチュアがその手工業的な技術的基礎をもつてしては未だ一般に手工業や特に小工業・小商品生産を驅逐し得ない關係上、後者は商業資本を通して前者に従屬せしめられ、前者、即ちマニユファクチュアにおける生産過程に——典型的にはその「外業部」として——結びつけられるといふことである。マニユファクチュアの「廣大なる基礎」（マルクス）を成してゐる「都市手工業と農村家内工業」が驅逐され、資本主義的大生産が壓倒的となるためには、機械をもつてする工場の出現が必要であり、マニユファクチュアから工場へのこの推移が産業革命と呼ばれるものであることはすでに説明する迄もないだらう。

（註）「ロシアにおける資本主義の發展」第六章第六節

マニユファクチュアから大工業への移行の社會的條件としての労働者の「我儘」と資本家相互の自由競争とについては先きにも説明した。ここで尙ほその經濟的條件として市場の擴大を指摘する必要がある。マニユファクチュアは

大市場の存在を前提とし、且つ益々市場を開拓し、國內市場から世界市場へと進むものであるが、やがてマニユファクチュアは自分の創出した世界市場の需要を満たし切れなくなり、大工業に移らなければならなかつた。そしてこの移行の技術上の條件としては、すでにマニユファクチュアの發展と共に、労働器具、機械の生産がそこで開始されたといふことが擧げられる。

小商品生産からマニユファクチュアへ、マニユファクチュアから大工業へのこのやうな發展は資本の原始的蓄積を背景とするものである。原始的蓄積とは、一方の極に資本および資本たり得べき生産手段を集中せしめ、他の極に資本なき、生産手段なき、従つて自己の労働力を賣る以外に生計の途なき、「自由な」労働者を大量的に造り出し、以つて資本主義的生産に必要な條件を創出することである。従つて資本の原始的蓄積において最も重要なのは、土地、農民の分離である。土地から離れた農民は労働市場にあらはれ、農民から分離した土地には資本主義的農業經營の可能性が造り出される。そこで、單に工業労働者が多量に發生するのみでなく、農村における農業上の賃銀労働者も發生し、農村における自然經濟的要素の解體によつて國內市場が廣汎に開拓されるといふ結果になる。マルクスはイギリスにおける共同地の「圍ひ込み」の例によつてこの過程を説明し、土地からの農民の分離が資本の原始的蓄積においては基本的な契機であることを示した。この分離が充分に行はれない所では、農業の資本主義化は充分に進行せず、國內市場は狹隘ならざるを得ない。

マルクスはなほ原始的蓄積の種々の契機として殖民制度、國債、高率租稅、保護貿易、貿易戰等をあげ、これらのものが「本來のマニユファクチュア時代の産物」であり、「大工業の幼少期」に巨大に發展したことを指摘する。と

ところで原始的蓄積において舊來の生産關係は變化せしめられ、資本主義的生產關係が創造されるのだから、それは決して經濟の自生的運動たるにとどまるものではなく、ゲヴァルトの發動なくしては濟まされない。「原始的蓄積の種々の契機は、今や多かれ少なかれ時間的順序をもつて、特にスペイン、ポルトガル、オランダ、フランスおよびイギリスに分配される。イギリスにおいてはこれらの契機は十七世紀末に殖民制度、國債制度、近代的租稅制度および保護制度の中に體系的に結合せしめられる。これらの方法は一部分は最もブルータルな強力^{ゲヴァルト}、例へば殖民制度に依據してゐる。だからそれらすべてのものは、封建的生產様式の資本主義的生產様式への轉化過程を温室的に助長し、推移を短縮するために、國家權力を、社會の集積され組織された強力を、利用するものである。強力は新たな社會を孕めるすべての舊社會に對する助産婦である。それは自身一つの經濟的力である。」——とマルクスは書いてゐる(註)。

原始的蓄積の過程において、その障害となる封建的生產關係およびそれに依據する政治體制は………に………される。それがブルジョア變革である。

(註) 「資本論」第一卷第二十四章

日本において、明治政府の手で行はれた原始的蓄積にとつては、土地からの農民の分離が殆どなされず、租稅および國債が重要な役割を演じたといふ點が特徴的である。就中ここで最も重要な意義を持つた地租は、土地への農民の事實上の緊縛を前提とさへするものであつた。純然たる封建的の經濟外強制の代りに、半農奴的農民の生計補充のための副業(特に養蠶)およびこの生計補充のための賃銀労働(農民家族員の出稼ぎ)に依據する工業部門(就中、機業、製絲、紡績)がかかると緊縛を事實上可能ならしめ、公力・經濟外強制によつて保證される封建的高率地代の收得

を可能ならしめた。他面において、工業における労働賃銀は、それが半農奴的農家家計の補充用であることにより、また農村からその低い半農奴的生活水準を身につけて流入して来る労働者に支拂はれるものであるといふことによつて、著しく低いものにされる。一言でいへば、ここでは「賃銀の補充に依つて高き小作料が可能にせられ又逆に補充の意味で賃銀が低められる様な關係」(山田盛太郎氏の表現)が成立する。日本の獨占資本主義は、その封建的純粹性を失ひつつも、而かもなほ強固に残存せしめられてゐる、かかる半封建的農業關係を自己の存立の不可欠な契機として包含し、その基礎の上に立つてゐるものである。このことによつてその國內市場の狹隘さが制約され、ここからして外部へのエクспанジョンの必至性が、即ちわが國の資本主義の特にアグレッシヴな性質が歸結される。

この問題に關聯して、農業における資本主義の發展に關する若干の問題に一瞥を與へる必要がある。細分された土地への緊縛からの農民の解放は、單に解放された農民の一部の農業労働者への轉化の可能性を與へるのみでなく、封建的關係の廢棄によつて農業の資本主義化の途を開拓する。このやうな「解放」はイギリスにおいては地主自身の手で遂行された。そこでは地主は共同地を收奪し、自己の土地から農民を文字通り掃蕩した。それは羊毛マニユファクチュアの繁榮に促されて、耕地を羊牧場に轉化する必要から生じたものであつた。だが封建的土地所有およびそれに基づく農民からの農奴制的な收取は、地主がこれに依據してゐる限りでは、農民の運動によつて初めて徹底的に打破される。これはアメリカ的な行き方であつて、ここでは地主的大土地所有は分解して小ブルジョア的所有が生れ、資本主義的農業の廣汎な生長のための地盤となる。イギリスの場合の如く土地利用方法の特殊な變化によつて制約されない限り、封建的土地所有關係の徹底的な解決にはただアメリカ的な途があるのみである。

これに反し、地主自身が農民の封建的隷屬を利用して、自己の土地において商品生産を行ひ、徐々に資本主義的經營に移行してゆく場合がある。プロシヤのユンカー經營がその典型である。しかしかかるプロシヤ的な行き方は單に農民にとつて重壓であるといふ意味においてのみでなく、また發展テムボの緩漫さ、封建的關係の清掃の不徹底さといふ意味においても、農業の資本主義化のための充分な途ではない。

さて、日本における農業の資本主義化は、アメリカ的な途でも、プロシヤ的な途でも、未だ決して解決されてゐない。だが日本農業が、全體として考察される場合、プロシヤ的な途を進み得ないものであることは、日本資本主義そのものが半封建的農業を自己の存立の不可欠な條件としてゐるといふ事情によつて決定されてゐる。かかる存立條件としての封建的高率地代の残存は、地主のためには勿論その固執を不可避的ならしめ、小作農および地租を納める自作農のためには賃銀労働や生産手段（土地以外の）に投資する餘地を與へない。マルクスは、封建的土地所有の分解の跡に生じた零細土地所有の下においても、土地私有のために、土地購買により多く資本が投じられるのに比例して生産部面への小農民の投資がより少なくされ、それだけ農業の資本主義化が阻止されることを指摘してゐる。「土地購買のためになされる貨幣資本の支出は、何ら農業資本の投下を意味しない」のである（註一）。況んや、封建的高率地代が維持されてゐる地主の所有地に、資本主義的經營が普遍的に發生し得ないことは當然である。土地が動産化されて自由に賣買されるとか、小作が「自由意志」による契約の形式を取るとか、農業において商品生産（單純商品生産）が行はれるとかいふことは、その國の經濟の全體においては資本主義的生產が優位であり、農業がこの資本主義的生產によつて影響されるといふことは意味しても、未だ決して農業そのものの資本主義化を意味しない。「農業に

おける資本主義の主要な徴表たり指標たるものは賃銀労働である」(註二)、即ち資本主義的商品生産である。

(註一) 「資本論」第三卷第四十七章

(註二) レーニン「北米合衆國における資本主義と農業」第十六章

以上で明かなやうに、資本主義的社會構成には極めて屢々——後進國において——舊社會の生産關係が從屬的にウクライドとして殘存する。そしてこのウクライドは、國によつて廣さと深さを異にするものであるが、全人口中の顯著な部分がかかるウクライドの桎梏の下にあるときには、その清算はもはや序でになされるものではなく、またそれは自然に消滅するものでもない。

資本主義はかやうに農業部面においては往々にして一定の制限にぶつかるとはいへ、資本主義的社會構成は從來の歴史において最も飛躍的に生産力を發展せしめたものである。そして生産力のかかる驚くべき發展は資本主義的生産關係によつて促進された。だが、資本主義的生産關係は今や生産力の一層の發展の桎梏となつてゐることはすでに述べた通りである。資本主義的所有關係は社會的生産の一層の發展を阻害し、兩者間のこのコンフリクトの故に獨占資本の支配下においても生産のアナーキーは排除されないのみか、資本主義的生産様式にとつて益々脅威的となるクライゼとなつてあらはれ、それはただ生産力の驚くべき浪費(クリーグ、生産縮少)、勤勞者の生活條件の未曾有の惡化によつてのみ維持される。併しながら資本主義はこの勤勞者階級の生長をもたらすことによつて、同時に自身の矛盾の解決者を産出するのである。

資本主義が人類史上極めて進歩的な意義を持つてゐるのは、それが人類史の「自由の王國」への飛躍の物質的前提

を生産力の目ざましい發展によつて造出し、かくして歴史上最後のアンタゴニスティッシュな構成となるといふ理由からである。

ソヴェート社會

ソヴェート聯邦が資本主義と異つた型の經濟體制、異つた社會經濟的構成を示してゐることは何人にとつても疑ひはない。ここではただソヴェート社會の存立條件の一端とその發展段階について一言するに止める。

この社會の一大特質は、それを形成する生産關係が資本主義體制の中に自生的にウクラードとして決して發生しないといふことである。この點でそれは、奴隸制が原始社會に、封建制が奴隸制社會に、資本主義が封建社會に、ウクラードとして自生的に形成されるのと根本的に相異なる。資本主義は生産力の發展によつてソヴェート社會の生誕の物質的前提を創出したにとどまり、ソヴェートの生産關係を自身の中に生成せしめはしなかつた。そこで、資本主義の發展に當つては、初め、資本主義的生產關係が封建社會の胎内に發芽し、生長し、最後に、ブルジョア政權の樹立によつてかかる生産關係の確立が一應完成されるのに反して、ソヴェート社會の場合には、ソヴェート國家の創立が新しい生産關係の創出過程の端緒となつたといふ點に、兩者間の原則的な差異がある。この差異はスターリンが強調してゐるところである。

ソヴェート國家の創始が新しい型の生産關係の創出過程の開始を意味するものに外ならぬとするならば、ソヴェート聯邦が何らかの完成的な社會經濟的構成を代表せず、かかる構成の完成に向ふ過渡期にあるものだといふことは明らかである。この過渡期において、新しい生産關係の造出の上に決定的な役割を演じるものはその國家であり、國家を

牛耳るクラッセであり、独自の政治形態である、といふことを忘れるものは客観主義者である。

ところで、かかる過渡期は更に次のやうに細分される。

- (1) 「十月」とその直接の繼續（一九一七年十一月から一九一八年十一月まで）
- (2) Bürgerkrieg と戦時コミニズム（一九一八年十一月から一九二一年三月まで）
- (3) 新經濟政策の基礎における國民經濟の復興と聯邦組織の創立（一九二一年三月から一九二五年四月まで）
- (4) 國民經濟の復興の完成とソシアリスティックな再建への移行（一九二五年四月から一九二八年十月まで）
- (5) ソシヤリズムへのソ聯邦の進入とソシヤリズム經濟の土臺の建設（一九二八年十月から一九三三年一月まで——第一次五

ケ年計畫）

- (6) ソヴェート聯邦におけるクラスなきソシヤリズム社會の建設（一九三三年一月に始まる第二次五ケ年計畫）

これらの各々の段階にもまた多くの小段階があるのだが、それについては、また右にあげた各段階の特質については、説明を省略して、ただ次のことを指示して置かう。即ち、このやうにして造り出されつつある生産關係は、資本主義の下でその生産關係と兩立しなくなつた發展した社會的生產に照應するもので、そこではアンタゴニズムは存在せず、生産のアナキーは止揚される。そして生産關係と生産力の間の矛盾が依然として生産力の發展の推動力であるとはいへ、この矛盾は、生産手段と労働者との間のアンタゴニズムが缺除し、前者が後者のために利用されるといふやうな生産關係の故に、益々増大する大衆の消費によつて擴張再生産が促進される、といふ點に表現される。

舊ロシアにおいて半封建的な關係の下にあつた農業の發展は特別興味あるものである。それはブルジョア民主主義

の徹底による無数の獨立農民の創始をもつて開始される。だがこの農民・小經營者が農業ブルジョアに生長せず、ソシャリズムの途へ進むためには、彼等（中農・貧農）をプロレタリアートの指導の下に協同化（コルホズ化）し、階級としてのクラーク（資本主義的要素）……が必要であつた。コルホズは、先づその「マニユファクチュア」的時代、即ち舊來の後れた技術的基礎上での協業の時代から、機械化の時代に入つてその客觀的基礎が完成される。この意味で機械・トラクター配給所網の創設はソヴェート農業再建において極度に重要な意義を有する。

最後に、資本主義諸國に對して謂はば異分子的なソヴェート同盟が何故單獨に存續することが出来るか、何故に資本主義諸國……出得ないか、といふ問題に觸れる必要がある。この問題は現代帝國主義

諸國の國際關係の緊張の問題と不可分に結びついてゐるもので、一般的には、帝國主義時代、就中その現段階において特に顯著に作用する資本主義發展の絶對的法則たる、資本主義の發展の不均等性の法則によつて説明される。

資本主義の不均等的發展の法則のお蔭で、國內的には種々の企業間において資本主義的發展の程度やテムポは不均等で、つねにその均り合ひが變動するため、國民經濟の「組織化」、計畫化は獨占が如何に發展しても不可能であり、また國際的にこれを見れば、資本主義は各國において同時に發展するのではなく、先進國と後進國が競争し、且つ各國の發展テムポにはそれ／＼相異がある。一つの國においては資本主義は急激な上昇的發展から緩慢な發展テムポ又は下向的發展に移つてゐるとき、他の國においては急激な昂揚、膨脹又は依然たる上昇的發展が行はれるといふこと、例へばドイツにおいては産業革命が未だ完成しなかつた十九世紀の第三四半期にイギリスにおいては早くも「帝國主義の最も重要な一つの特徴——大きな殖民地領有と世界市場における獨占的地位」（註一）があらはれたとか、西

ヨーロッパの資本主義が下向的發展に向つたときに日本資本主義は上向的に發展してゐたことは、すべて資本主義の發展の不均等性を示すものである。かかる不均等性の故に資本主義諸國の勢力の均り合ひは斷えず變動し、新興資本主義國は自己の増大した勢力に照應する新たな領土を要求する。この要求は、地球上に未だ先進資本主義國によつて獨占されてゐない土地が残つてゐた間は、資本主義諸國間の激しい軋轢なしに充たされた。ところが帝國主義の時代に入ると共に事情は變つてくる。「帝國主義とは、獨占と金融資本との支配が成立し、資本輸出が顯著な意義をもち、國際的トラストによる世界の分割が始まり、且つ最大の資本主義諸國における地球の全領土の分割が完了してゐる、といふやうな發展段階における資本主義である」(註二)。かやうにこの時代には領土や勢力範圍の分割が完了してゐるのだから、資本主義諸國間の勢力上のバランスの變動は、必然的に領土の再分割を一つの定言命令として口授する。過ぐるヨーロッパ戰爭はかやうにして勃發した。現在において如何にドイツやイタリーの帝國主義が領土獲得の衝動に驅られてゐるか、それに對してイギリスやフランスが如何に自己の既得權の維持に汲々としてゐるか、等々の事實はいづれも、資本主義の不均等的發展の法則が帝國主義、特にその一般的クリーゼの時代に如何に鋭くあらはれ、如何に領土再分割の問題をめぐつて列強間の關係を緊張せしめるかを明白に語つてゐる。

(註一) レーニン「帝國主義」第八章

(註二) 同上第七章

帝國主義列強間の益々深まるこのやうな矛盾の故に、一方では、この………において解決しようとする動向が力強くあらはれる(例へばソ聯邦のウクライナを占據してドイツとポーランド間の領土再分割にか

らまる紛争を解決しようとするヒトラー黨の綱領)と同時に、同じ理由によつて、他方では、帝國主義諸國間および諸國のブロック間の協力、團結は益々困難となるばかりか、コンフリクトの傾向が益々顯著となる。こゝにいふ事情のためにソヴェート聯邦は資本主義的環境に圍繞され乍らも、よく自己を存續・發展せしめることが出来るのである。その際、ソヴェート聯邦の國際的地位を安全ならしめる上に演ずる外交の役割は重要である。

第八章 階級と國家

第一節 唯物史觀と階級理論

人類史の一定の發展段階において生産關係が階級關係の形式をとることについてはすでに説明した。氏族制社會の崩壞以來、實に人類社會は階級的分化に立脚し、一つの社會經濟的構成から他のそれへの推移は階級關係の根本的な變動を意味した。ここでは生産力と生産關係の間の矛盾は階級間の矛盾となつてあらはれ、且つ後者を通して展開される。従つて資本主義の生産力と生産關係の矛盾が極度に緊張してゐる現在では、階級の存在を否定することは如何なるブルジョア學者でも能くしないところである。問題はただ、階級の意義、本質を如何に把握するかにある。

すでにマルクス以前のブルジョア學者も社會における階級および *Klassenkampf* の存在を確認した。だが彼等は、フランスの王政復古期の歴史家や古典派經濟學者の例で明白なやうに、封建社會と異つてブルジョア社會の階級關係は自然的な秩序であり、それ故それは不變的に存続せねばならぬ、といふ見地に立つてゐた。従つて彼等はブルジョアジーに對するプロレタリアートの不從順を罪惡と見た。

この方面におけるマルクスの功績は、階級の存在を歴史的、經過的な現象として辯證法的に把握し、階級的アンタゴニズムそのものは——従つてもちろん如何なる階級的社會構成も——歴史的に生滅するものであつて、決して自然

的な秩序として永久に存在理由を持つものではないといふことを明白にした點にある。彼は資本主義社會の經濟的構造の嚴密に科學的な分析に依據して、資本主義的構成が階級的アンタゴニズムの最後の歴史的形態であることを解明した。そして彼は、アンタゴニズムのこの最後の歴史的形態の……の過程は如何にして、如何なる形式の下で行はれるかを吟味し、この過程におけるプロレタリアートの……したことによつて、一切のブルジョア學者の御用學的な階級理論から決定的に異なる科學的理論を建設した。マルクス主義の階級理論の特徴は、ワイデマイヤーへのマルクスの有名な手紙において簡潔に、適確に表現されてゐる。

「私に關していへば、近代社會における諸階級の發見の功績も、その相互の抗争の發見の功績も私のものではない。ブルジョア歴史家達は私よりずっと以前にこの抗争の歴史的發展を叙述し、ブルジョア經濟學者達は諸階級の經濟的解剖を叙述した。

私が新たに爲したことは次のことの證明にあつた。即ち、(1)階級の存在はただ生産の發展に固有な一定の歴史的な闘争形態とのみ結びついてゐること、(2) *Klassenkampf* は不可避免的に *Proletariat* の……に導くといふこと、(3) この……そのものはただ……への分化の餘地のないやうな社會秩序……への過渡を成すものにすぎぬといふこと、の證明にあつた。(ロシヤ譯によつて引用)。

これらの言葉によつて、資本主義社會の諸階級に關する理論的處理におけるブルジョア學者とマルクスの相異、後者の特質は明白に理解される。そしてマルクスがここに語つた階級理論の眞實性は、今日の歴史そのものによつて實證されつつあるのである。

階級關係を捨象して社會過程を觀察するストルーヴェの自由主義的な抽象的客觀主義、Klassenkampf における政治の意義を無視する經濟主義、プロレタリアートの階級運動をブルジョア自由主義の精神で稀釋し、それをブルジョアジーにとつて安全な範圍内に切縮めるメンシェヴィズム、カウツキー主義等々に對するレーニンの論争は、マルクスの階級理論の本質の解明、その一層の具體化、發展において最も注目すべき寄與をなしてゐるものである。

周知の如く、プロレタリアートの階級運動には三つの形態がある。經濟的、政治的およびイデオロギー的の形態が即ちこれである。だがこの三つの形態は單に並立的なものでなく、正に政治的の運動形態において、しかも社會の政治的上層建築の Umwälzung に向けられるやうな形態において、最も積極的な形態を探り、集中的に表現されるといふことも、唯物史觀における重要な主張である。そしてこの主張はあらゆる歴史的事實によつて裏書きされてゐる。

レーニンはかかる主張の見地から、Klassenkampf の自由主義的概念を批判した。あらゆる Klassenkampf は政治的 Kampf であるといふマルクスの有名な命題から、日常の經濟的要求のための原始的抗争がすでに政治的 Kampf であるといふ結論を導き出し、本來の政治運動を否定した經濟主義者の自由主義的見解や、政治の領域における運動を認めても、この領域に Staatsgewalt を入れないで、單に部分的改良のための運動のみを入れる自由主義は、彼の最も鋭い批判の對象であつた。「經濟主義者は、Klassenkampf の中で、ただ自由主義ブルジョアジーの見地からみて最も我慢出来るもののみを認めて、自由主義者以上に進むことを拒絶し、より高い、自由主義者にとつて受容出来ない Klassenkampf を認めることを拒絶した。經濟主義者はこれによつて自由主義的労働政策家に轉化した。……自由主義は政治の領域においても Klassenkampf を認めようとする。だがそれはこの領域に Staatsgewalt の構成が這入らな

いといふ一つの條件付きである」(註)。彼はまた、その名著において、Klassenkampfの存在を認める點ではマルクス主義者もブルジョアも變りはないことを指摘し、「ただ Klassenkampf の承認を Proletariat の……の承認にまで擴張する者のみがマルクス主義者である」と斷定し、かかる擴張に反對するカウツキー主義やメンシェヴィズムの自由主義的本質を痛烈に摘撥した。

(註)「階級闘争の自由主義的概念とマルクス主義的概念」

マルクスの階級理論——レーニンによつて一層展開された階級理論——は、資本主義的構成の……の過程の合法性、特にいはゆる過渡期の合法則性の理解にとつて決定的に重要なものである。従つてこのやうな理論にまで到達しない「唯物史觀」は、現代において經驗されつつある歴史過程の合法則性の理解に全く役立たない。そればかりでなく、かかる自由主義的な「唯物史觀」は、理論的基礎において、經濟的唯物論、經濟の自生的運動への拜跪や、客觀主義に通じるものである。辯證法的唯物論がプラクシスの意義を正しく評價したことによつて舊唯物論の觀照的性質を除去したと云ふとき、そのプラクシスにおいて正に世界を變化せしめる Klassenkampf が肝要なものであることに留意しなければならない。客觀主義や觀照的唯物論に對する批判はかかる階級理論なしには不徹底たるを免れない。社會過程における人間の能動性の意義の正しい評價はここまで具體的に展開されて、初めて、客觀主義や觀照的見地の弱點を除去し得るのである。

以上の極めて不十分な説明によるも、唯物史觀における階級理論は單に實際上のみならずまた理論上でも非常に重大地位に在るものであるといふこと、それは單にマルクスの科學的ソシアリズムに關聯して決定的に重要であるの

みでなく、また辯證法のおよび史的唯物論の理論的内容の展開において不可欠な契機を成してゐるといふこと、が一應は明白になつたであらう。そこで今度は、簡単にではあるが、階級に關する唯物史觀的規定を明白ならしめるために先づ階級の發生とその歴史的變遷に立入らう。

第二節 歴史的範疇としての階級

階級の發生

階級の存在は人類史の一定の發展段階、生産力の一定の發展水準に結びついてゐる現象であるから、それは決して人類そのものと共に古いものではない。生産力の一定の發展段階において初めて階級が發生したといふことは單に臆測でなく、實證的研究によつて論證された事實である。

周知の如く、エンゲルスは階級關係の發生の二通りの経路について語つてゐる。次に彼の「反デューリング論」(第二篇第四章)から、これに關する彼の言葉を引用しよう。

「人間は本來、動物界——狭い意味での——から出てくるや否や歴史に足を踏み入れる。だがいまだ半ば動物であり、粗野であり、いまだ自然力に對して無力であり、いまだ自分自身の力について無知である。だから動物と同様に貧しく、動物と殆ど同様に不生産的である。生活状態の一定の平等が支配し、家族の長達にとつてもまた社會的地位の一種の平等が支配する——少なくとも社會階級の缺如が支配し、かかる缺如は後期の文化民族の自然生的な農業共同體においてもなほ存続するものである。かかるいづれの共同體においても、最初から、たとへ全體の監視の下にお

いてであるにせよ、その保護を個々人に委せねばならぬところの共同の利害が存立する。紛争の解決、個々人の越權行爲の制壓、特に暑い地方における河海沼湖の管理、最後に、宗教上の機能がそれである。かかる職能はあらゆる時代の原生的共同體において、例へば最古のドイツのマルク共產體において、亦今日なほインドにおいて見出される。

これらの職能は、もちろん一定の………られてゐるもので、………である。漸次に生産力が上昇する。より稠密な人口は、個々の共同體の間に、ここでは共同な利害、かしこでは對立的な利害を造り出し、より大なる全體へのこれらの共同體の成群は更に新しい分業を喚起し、共同の利害を保護し、對立的な利害を防止するため機関の創造を喚起する。すでに群全體の共同の利害の代表者として、各個々の共同體に對しては特殊な、場合によつては對立的でさへある地位を占めるところの………、やがて一部分は、すべてが自然生的に經過する世界において殆ど當然に現はれてくる………によつて、また一部分は、他の群との衝突の増加につれて増大する必要によつて、より一層獨立的なものとなる。」このやうにして最初社會の………であつたものが、社會に對して相對的に獨立的な、そして遂に對立的な要素に轉化する。多くの近親氏族（又は、より典型的には、多くの娘氏族を統一する母氏族たる大氏族）から成立する種族の軍師や、諸種族の地域的統一としての民族の長の如きがそれである。社會の一定の機関の社會からの獨立、階級分化が進行すると共に、原始社會は終りを告げる。

「だがかかる階級形成と並んで、なほもう一つの階級形成が行はれる。農耕する家族内部の自然生的分業は、繁榮の一定の段階において、一人又はもつと多くの他人の勞働力の導入を可能ならしめた。舊來の土地共有が既に崩壊したか又は少なくとも舊來の共同農耕がそれぞれの家族による分割地の個別的耕作に席を譲つた地方では、特にさうで

あつた。生産は、人間労働力が今や單なる自分の生計に必要な以上のものを生産し得るまでに發展した。より多くの労働力を扶養する手段が存在するに至つた。これらの労働力を働かせる手段もまた存在するに至つた。労働力は一つの價値を獲得した。だが自身の共同體やそれが所屬せる團體は、働かせうる餘分な労働力を提供しなかつた。これに反して戦争がこれを提供した、ところで戦争は多數の共同體群の同時的並存と同様に古いものであつた。今まではひとは戦争の捕虜をどうしてよいか知らなかつた、そこで、捕虜は單に撲殺されたり、もつと初期には喰はれてしまつた。ところが現在到達された『經濟狀態』の段階ではそれは一つの價値を取得した。そこでひとは捕虜を生かして置いてその労働を自分に役立たせた。かくて強力は、經濟狀態を支配するどころか、却つて經濟狀態への奉仕を強要された。奴隸制が發明された。ここでは、戦争が奴隸制を造り出したのでなく、奴隸制を可能ならしめ、且つ必然的ならしめる迄に發展した生産が捕虜の奴隸への轉化を制約したのだといふことを銘記しなければならぬ。ゲヴァルトは決してそれ自身から新しい生産關係を造り出すものではない。それはただ新しい生産關係の可能性が現存してゐるときに、その實現を媒介する契機となり、新しい社會秩序の生誕の助産婦となるにすぎない。奴隸の發生は生産そのものの發展の結果であり、餘剰労働が不可能なやうな生産の低度なる段階においては戦争の捕虜は決して奴隸として利用され得なかつた。そして共同體内部の貧富の差の増大や高利貸業の發生につれて債務奴隸が發生した。

最初の階級社會は奴隸所有に基くものであるから、そこでは基本的なアンタゴニズムは奴隸とその所有者の間のそれである。だから社會的職能の遂行機關が全社會から獨立化するにつれて生ずる階級分化は元來、奴隸制とは別箇なものではなく、前者は後者を基礎として成立するものである。古代社會においては貴族乃至富者は最大の奴隸所有者

であつた。これに對して自由民たる平民は自己の家族の勞働力の附加物たるにすぎない家族員のやうな奴隸の持主であり、大部分は奴隸を所有しない貧困な農民乃至手工業者であつて、やがては債務のために奴隸に轉化するか、それともローマのプレブスのやうに奴隸經濟との競争に負けて全く零落し、ルムペン化したかである。エンゲルスは、種族の機關が民意の道具から民衆に對する・・・の獨立的機關に轉化し、種族が分裂して國家が成立することについて、「しかしこのことには、富に對する欲望が氏族員を富者と貧者に分裂しなかつたら、『同一氏族内の財産差別が利害の一致を氏族員の敵對に轉化』(マルクス)しなかつたら、また奴隸制の擴大によつて既に、生計の獲得は奴隸にのみ相應しい活動であり、且つ掠奪よりも尙ほ恥づべきものであると考へられかけてゐなかつたら、斷じて不可能であつたらう」(註)と云つてゐる。

(註) 「家族、私有財産および國家の起源」第九章

階級關係の
歴史的變遷

階級は、このやうに、一定の歴史的段階の產物であり、また歴史と共に變化する。古代社會の基本的階級は奴隸と奴隸所有者であり、封建社會の基本的階級は農民と地主・領主であり、資本主義社會のそれは賃銀労働者と資本家である。このやうに歴史の一定段階において種々の社會經濟的構成はそれ〴〵固有な階級關係によつて特徴づけられる。各種の歴史的社會構成における階級關係の差異は、生産力の發展段階の差異によつて規定される生産關係の構造上の差異の表現に外ならず、それは直接に收取、*Ausbeutung* の様式の差異の中に表現される。一切の收取は餘剰生産物の略取である點において共通であるが、その歴史的形態は種々の社會經濟的構成において相異し、この相異の中に各種の社會構成の階級編成の相異が端的に反映する。

かくて例へば奴隸制の下では所有の主體でなくて客體たるにすぎない奴隸。人格的に何らの自立性をも認容されない奴隸、の労働の收取、しかも労働力の再生産をさへ顧慮せぬ強制的労働の收取が特徴的であり、そこでは毫末の餘剰も奴隸に残されない。封建制の下では餘剰労働は地代の形態を採る。封建的地代に労働地代、現物地代、貨幣地代があることはすでに述べたが、農奴制にとつて最も典型的なのは徭役労働（又は賦役）の形態において收取されるところの労働地代である。それは地主に對する農民の最も直接的な人身的隷屬を前提とし、且つ制約するものである。東北地方に未だに存在してゐる名子制度はかかる農奴制的労働地代、徭役労働の殘存物である。ところで封建制の下では、労働地代の場合にすら、一部の農民は自分の割當地における労働の強化、労働日延長等によつて僅かながらも蓄積の可能性を獲得する。かかる可能性は現物地代や貨幣地代の下においては多くの場合一層容易に與へられる。だが勿論それは一部の農民のことであつて、その反對に他の部分の農民はより一層窮乏する。かやうにして農民の内部における階級的分化が起り、富農、中農、貧農、作男又は農業労働者が發生する。農民の階級的分化は農業への資本主義の侵入によつて促進され、農業の資本主義化が徹底的に成就されるときには農村には資本主義的借地農業家と、彼等から餘剰價值の一部分を地代として受取る土地所有者と、農業労働者だけが殘される。

封建的地代の中、最も後に普遍的にあらはれるのは貨幣地代である。何故ならそれは貨幣流通、従つて商品生産の一定の發展程度を前提とするからである。ところで商品生産の一層の發展の結果、人間の労働力が商品として賣買されると共に、賃銀労働者があらはれ、資本主義的商品生産が發生し、餘剰労働はそこでは餘剰價值の形態で收取される。

資本主義の下では労働者はその「自由意志」によつて自分の労働力を賣るのだから、資本家と労働者の關係は、互ひに自由な人格間の契約の形式を採り、理想的な資本主義の下では労働者と資本家は國家に對する關係においては、即ち法律上では平等である。ここでは實質上の不平等、經濟上の不平等が形式上の平等、法律上の平等の假象によつて蔽はれる。これに反し奴隸制や封建制の下では階級支配は經濟外強制をも必要とする故に、それは國家によつて、法律によつて、確認され、強固にされる。従つてここでは階級は身分としてあらはれる、身分とは階級と別箇なものでなく、それに法律的形式をまとはせたものである。例へば日本封建制でいふ士農工商の類ひがそれである。士農工商といふ身分規定の中には、武士と農民が基本的階級であり、武士が治者階級であつて、手工業者と商人は副次的階級であるといふ事實が表現されてゐる。だが商人身分は封建社會の内部に資本主義的生産様式をウクライドとして發育せしめ、かくして封建制の倒壊の後、資本主義社會においてブルジョアジーとして治者階級（又はその一員）となつた。現代においても法律的に特權を與へられてゐる貴族は身分であるが、かかる制度は封建的遺制であつて、資本主義的關係がより純粹に發展してゐる國には存在しない。

このやうにして、階級は何よりもまづ歴史的範疇である。社會の經濟的構造、従つて階級的編成のかかる歴史的に變異する特質の故に、各々の社會構成の下における被收取階級、*ausbeuten* される勤勞者階級の運命もそれ／＼異つたものである。これらの階級は何れも彼等の上に重壓としてのしかかる現存生産關係の……公然たる、乃至隱然たる形態で……、その點でまた一般的に生産過程における労働力の所有者の階級は生産力の發展の利益においてその生産力の桎梏となつた生産關係の止揚のため

に闘ふ進歩的階級であると云はれるが、同時にこれらの階級の歴史的運命は、彼等がその中に置かれてゐたところの社會構成の發展の特殊な合法則性のために、互ひに異つたものであるといふことをも念頭に置かなければならない。で、具體的に、奴隸や、農奴的農民や、賃銀労働者の運命が如何に相異なるかを理解し、かかる相異の理由を知らなければならぬ。すでに述べたやうに、古代社會の奴隸は新たに發生した封建制の下で治者階級へと自らを高め得なかつたし、封建制下の農村人口は「理想的」な資本主義の下では少數の資本主義的小作經營者と土地所有者（但し農民から直接にその餘剰生産物を受取る封建地主でなくて、資本主義的農業家が賃銀労働者から收取する餘剰價值の一部分を、地代の形態で受取る土地所有者——多くの場合封建地主の轉化せるもの）と多數の農業プロレタリアートに分解する。かやうな事實は、奴隸制的構成の中には封建的農業が、封建制の中には資本主義的商品生産が自生的に發生し、その際、奴隸なり農奴的農民なりは現存構成の中に發生した新たな様式の生産の統禦者たり得なかつたといふことに由來する。これと異つて、資本主義の胎内には後來の生産様式は決して發生しないから、ここではブルジョアジーは資本主義的生產様式とは別な新しい生産様式を創造し得ず、またプロレタリアートの一部分が資本主義の内部において新しい生産様式の擔當者となり、新しい階級に分化するといふやうなこともあり得ないから、………は獨自な形態をとり、プロレタリアートの運命、役割も奴隸や農奴とは著しく變はつてくるのである。かくて階級は、社會經濟的構成そのものと同様に、何ら不變な固定したものではなくて、生産力の發展と共に發生し、變化し、止揚されるものである。

だから階級の存在は、決して、幾分でも發展したあらゆる社會構成に見られる社會的分業によつて必然的に規定さ

れるところの、従つて永久の將來に向つて存續するところの超歴史的現象ではない。成る程、社會的分業の或る程度の發展は階級の發生の條件であつた。しかし社會的分業は私有を知らぬ共同體においても行はれたし、また行はれ得るものである。ただ私有財産が生産力の一層の發展の條件として現はれたときに、初めて社會的分業は階級的分化の基礎となり得たのである。

或はまた、社會の階級的分化を個々人の間の生存競争から説明し、治者階級は優れた天賦を有する優勝者の集團であり、被治者階級の成員は能力の劣等な落伍者である、抔と云ひ、階級的分化を超歴史的、永遠的なものとするのも誤謬であることは云ふまでもない。かやうな見地からは各々の歴史的時代における階級關係の特質、その歴史的に特殊な規定性は何ら理解せられず、總じて階級の科學的把握は不可能である。優生學者の中には、とかく富者や貴族の中に優れた遺傳的素質を見出し、これに反し労働者や農民を知的、道德的に見て先天的に劣等だと考へたがる人達があるが、これは全く御用學者的な誤謬である。資本家階級の中から有力な人物が出て、労働者の中から犯罪者が多く出るとしても、それは人々の階級的分化が生物學的要因に制約されるといふことを意味するものではありえない。それはただ、資本家階級の人々は、その富の故にあらゆる關係において有利であり、これに反し労働者は生活上の便宜を最小限にしか持ち合せないか、又は往々にしてこの最小限をさへ缺いてゐるが故に時には餘儀なく反社會的な犯罪行爲に出るといふことを意味するものにすぎない。優生學的に云へば、却つて、何代もの間筋肉労働から游離してゐた大名抔がなほ健康を保つてゐたのは、蓄妾制度等のために彼等の中に平民の健全な血がつねに混入したが故であると云ふべきであらう。

これらの問題に關聯して、今や階級とは何かについての規定に立入らなければならぬ。

第三節 階級理論

數量的階級理論

階級とは何か、種々の階級は何によつて互ひに區別されるか？ この問題に對する最も卑俗な解答は、階級の差別を貧富の差から説明する見解である。そこでは財産、或ひは収入の大小が階級の差別的徵表

と見做される。かかる見地は、同じ労働者の間にも収入においてかなりの差異があるとか、例へば労働者と小ブルジョアのやうに互ひに質的に區別されるものも収入の點から云へば往々にして相異がない等々といふ事實によつて反駁される。半封建的地主をも、資本家をもブルジョアと呼び、これに對して半農奴的農民や、労働者や、小商人や、下級サラリーマンを一括して無産階級と呼んだりするのは、明かにこの種の數量的階級理論である。かやうな理論は何よりもまづ、階級を規定するに當つて生産關係を無視してゐる點ですでに史的唯物論とは全く無縁なものである。

分配的階級理論

次に、これより一步進んだのがいはゆる分配説である。これは舊ロシアの修正主義者ツガン・バラノフスキーやカウツキーによつて主張されたもので、その特徴は収入の源泉の相異に階級の差別の窮局の根據を見出すことにある。カウツキーは一九〇三年に論文「階級的利害——特殊利害——共同利害」において、階級に關して次のやうな規定を與へた。「今やすでに吾々は、何が個々の階級を構成するかを知つてゐる。單に収入源泉の共通性のみならず、またそこから出てくる利害の共通性や他階級に對する對立の共通性がそれであつて、各々の階級

は自己の収入源泉をより豊潤ならしめんがために他階級の収入源泉を縮小しようと努力する。」カウツキーのこの結論は、彼自身の言ふところによれば、マルクスの「資本論」第三卷の最後の章において未完結のままに残された階級理論の完成ださうである。

マルクスは右の章において、近代社會の三大階級として賃銀労働者と資本家と土地所有者(註)をあげ、次に「賃銀労働者、資本家および土地所有者をして三大社會階級を形成するに至らしめるものは何か？」といふ問題を提出し、そして次の如く書いてゐる。「一見したところでは、収入および収入源泉の同一性がそれであるやうに見える。この三大社會グループの構成分子、即ちそれらを構成する諸個人は、それ／＼労働賃銀、利潤および地代によつて、即ち自己の労働力、自己の資本および自己の土地所有によつて生活するのである。」かう書いた後で、直ちにマルクスは、かかる見地からは例へば醫師や官吏の如きも二つの異つた階級を構成することになる、と云つてこれを反駁し、「同じことは、社會的分業が労働者の間に、また同じく資本家や土地所有者の間に、生ぜしめる利害上および地位上の無限の細分についても妥當するであらう——で、例へば土地所有者は葡萄園の所有者、耕地の所有者、森林の所有者、鑛山の所有者、漁場の所有者に細分される」と述べてゐる。(周知の如くここで「資本論」は杜切れてゐる)。

(註)

ここに云ふ土地所有者は資本主義的地代によつて生活するものであつて、封建的地主のことではない。ところで、かかる

意味の土地所有者の階級は、資本主義社會における基本的な階級ではない。マルクスも指摘したやうに、資本主義は必ずしも土地私有を絶對的條件とするものではなく、土地私有は却つて農業の資本主義化の妨害とさへなり得るものであるから、土地所有者は労働者や資本家と同じ程度に資本主義的生産の本質的な契機であるのではない。

カウツキーは明かにマルクスによつて否認された見地をもつてマルクスの見解の完成としてゐるのである。マルクスの云ふやうに、収入の源泉は社會的分業と同じく無限に細分されるし、利害についても同じことが云へる。ところがカウツキーは次のやうに考へる。土地所有者の利益——収入の増大——は労働賃銀又は資本利潤の犠牲において實現されるもので、一つの土地所有者の地代は他の土地所有者の地代を犠牲として増大するのではない、亦、労働賃銀は資本利潤又は地代を犠牲として高められるのであつて、一つの労働者層の賃銀の増大は他の労働者層の賃銀の切下げを結果するのでなく、却つてそれを高める傾向を持つ、と。かういふ事情から、彼は、先にあげたやうな結論を導き出してゐるが、しかし資本家の場合について見るならば、種々の資本家グループ間、トラスト間、カルテル間の利害の對立は、今やカウツキーの盟友ヒルファディングの唱へた「組織された資本主義」の理論を全く破綻せしめた程に明白な事實ではないか。一つの資本家が他の資本家と競争して、即ち後者の負擔において、自己の収入源泉を豊かならしめようとすることは誰にとつても疑のないことである。勿論、資本家の収入源泉たる利潤は労働者の生産する餘剩價值から成立するものであり、その限り労働者階級に對しては全資本家階級は共同の利害を持つ。しかしこのことは決して資本家相互の間に利害の不一致が存在することを排除しない。

カウツキーが収入源泉の共通性およびそれから生じる利害の共通性に、なほ派生的なものとして「他階級に對する對立の共通性」なるものを追加してゐることは、未だ彼の理論の弱點を救はない。第一に、階級上の對立の根據は單なる収入源泉の相異にあるものではない。第二に、階級は如何にして形成されるかといふことが問題であるときに、「他階級」を持つて來るのでは循環論證である。第三に、「他階級に對する對立の共通性」なるものは、カウツキー

においてはアンタゴニズムを内包せず、この對立は結局において量的大小の關係に還元され、従つて眞實の對立として把握されてゐない。何故なら、「各々の階級は自己の收入源泉をより豊潤ならしめんがために他階級の收入源泉を縮小 (einzuengen) しようとする努力する」のであつて、他階級の收入源泉を vernichten するのではないとするならば、かの對立は収入の量の大小をめぐつて生じるものにすぎないからである。カウツキーのこれらの命題を實際上に適用すれば、労働者の資本家に對する抗爭はただ賃銀の額の問題に局限されなければならないといふことになる。

カウツキーの強力説

カウツキーは「唯物史觀」においては、分配説を補強して、生産手段の分配が階級關係を規定する契機であると述べてゐる。「階級の問題は生産手段並びにまたそれをもつて生産された生産物に對する

支配の問題である。……かくて吾々はつねに、Ausbeutung とそれから生じる階級對立との基礎として、一方には生産手段の所有又は生産手段に對する支配權の事實を見出し、他方には、生産手段の適用なしには生存し得ない人々がかかる手段又はそれに對する支配を有してゐないといふ事實を見出す」(第二卷第四書)。だが、第七章で説明したやうに、生産手段の分配は生産の發展の歴史的結果であるから、それは階級關係において如何に重要な徴表であるにせよ、決して階級關係の形成の窮局の出發點ではあり得ない。然るに生産手段の分配をその基礎たる生産から切離す限り、カウツキーの見地は依然として分配論的である。今度はただ生産物の分配(それが収入の額を規定する)の代りに、それより根源的な、生産手段の分配が強調されてゐるだけである。だが生産手段の分配をその基礎たる生産との正しい聯關において理解せず、それを後者から切離すときには、社會過程の基礎を物質的生産としての生産に見出す唯物史觀から強力説に逸脱することは少しも不思議でないのみか、却つて當然の結果でさへある。で、カウツキーは、階

級と國家の發生の原因を原始共同體の内部における生産の發展に見出したエンゲルスの「假説」を否認し、グムプロウイツやオッペンハイマーの如きブルジョア學者と同様の典型的な強力説たる征服説を提唱する。

「階級及び國家の形成を原始共同體の内部に發生する諸要因から説明する試みは、何らの満足な結果を與へない。」何故なら、原始共同體における「原生的デモクラシー、多くの重要な生産手段の共有、各々の成員に對する一般的扶助は、收取する階級とされる階級の形成、および共同體を支配する、住民大衆から獨立なる國家權力の形成の方向への、あらゆる社會的發展を妨げる越え難い堤防を成すものだ」からである、とカウツキーは云ふ。そこで彼は「吾々は國家の發生および階級の出現を征服に還元する」といふ見解を主張する。彼は、彼が未だマルクス主義を知らず、ダーウインの追隨者であつた時代に、即ちグムプロウイツの著書「人種鬭争」(一八八三年)よりも早くに、征服説に到達したことを誇らかに語つてゐる。同時に彼はグムプロウイツやオッペンハイマーの征服説は征服が行はれる場合の經濟的條件を明かにしてゐないと云つて非難し、かかる經濟的條件について説明する。ところでその條件なるものは、もつぱら、定住的な農業種族と遊牧種族の並存といふことである。彼によれば、農業種族と遊牧種族はその生活條件の相異の故に互ひに異つた心理や能力を獲得し、このことが遊牧種族による農業種族の征服を可能ならしめ、ここにおいて國家と階級が發生する。「吾々が農業民と遊牧民の精神生活上の大なる對立を考察に付すならば、即ち前者の富裕と、但しまた遲鈍・無防禦性、從順とを、そして後者の貧困、武装力、冒險慾と、屢々亦活氣あり適應能力ある知能とを考察に付すならば、吾々は農業民および遊牧民といふ二つの要因の接觸は一定の發展段階において、遊牧民が農業民を自己に隸屬せしめ、貢納義務を負はせるといふ結果に導かなければならなかつたことを見るであら

う」。かやうに征服から階級および國家の發生を説明するカウツキーは、國家が共同體内部のアンタゴニズムの一定の成熟の段階において成立したものであることを認めず、「最初の諸階級を生ぜしめるその同じ行爲がまた最初の國家をも形成する。兩者はその存在の當初から合致するものである」と主張する。

カウツキーによれば、最初の諸階級が身分の形式をとるのも、それが一の種族による他種族の征服の結果發生する關係上、種々の階級は互ひに異なる種族だからである。このやうにして吾々はカウツキーの征服說の中に社會ダーウィニズム的、人種論的要素が多分に含まれてゐるのを見る(註)。

(註) カウツキーの以上の理論は彼の「唯物史觀」第二卷第四書による。

階級の唯物史觀的規定

以上カウツキーの理論を吟味したのは、それが唯物史觀の名の下に説教されてゐるブルジョア學說に外ならないからである。特に強力説はブルジョア學者の間で有力な一潮流をなしてゐるのみでなく、

わが國においてマルクス主義者によつて受け容れられた歴史もあるので、無視出来ないものである。

カウツキーは生産手段の分配によつて規定される所有關係が階級關係の特徴的標識であると云ふ限りにおいては正しいが、彼の誤謬は、生産手段の分配が生産の發展の結果であることを忘れ、それが單に強力によつて決定されると見做した點にある。彼は機械論者として、共同體に内在する矛盾の發展から階級の發生を説明する代りに、一の種族と他の種族の外的な衝突、征服の中に階級の發生の原因を見出してゐる。彼は「差別の内在的發生」(レーニン)といふ辯證法の見地を放棄し、共同體内部における交換の發展につれて貧富の差が増大するといふエンゲルスの命題を正しいと認めず、共同體内部の貧富の差の増大も基本的には戦争や奪掠によるものだと述べてゐる。

然るに吾々はすでに、奴隸の發生は共同體内部における生産力の發展の結果であつて、戰爭の俘虜はかかる生産力の發展段階において初めて奴隸に轉化したこと、後には、共同體内部の成員も債務奴隸となつたこと、貧富の差の増大や一定の社會的職務の社會からの獨立は共同體の胎内で内行的に行はれたことを見た。従つて餘剰生産物を生産し得る迄に發展した共同體に階級が發生するのは、この餘剰生産物をねらふ「貧困」にして勇敢且つ「知能」ある遊牧種族による該共同體（農業種族）の征服の結果ではなくて、却つて共同體内部の矛盾の發展の結果だといふことは明白である。かくて奴隸制的構成の下における生産手段の分配上の特徴——何らの生産手段をも有せず、みづから生産手段並みに他人に所有される奴隸と、多數奴隸を所有する富者と、それに附隨して多數の自由民たる貧民の存在——は、基本的には、先行する生産力の内在的發展的歴史的結果である。

強力説。征服説の誤謬は資本家と労働者の階級の形成史を見れば一層明白となる。資本の原始的蓄積においてゲヴァルトが槓杆となることは先きに述べた通りであるが、同時にまたゲヴァルトそれ自身は新しい生産様式を産出する原因でないこともすでに吾々の見たところである。一方の極に、資本たり得べき一定額の貨幣の所有者があらはれ、他方の極に、自己の労働力を賣ることによつてのみ生計を維持し得る労働者があらはれることは、本來的には、商品生産従つて商業が發展し、その結果、一方では一部の手工業者・商品生産者や商人の手に富が集積し、他方では多くの手工業乃至農村家内工業が買占人の高利貸的商業資本のために隸屬、零落せしめられ、また貨幣經濟の發展と共に加重する封建地主の收取のために多數の逃亡農民が出てくる等々といふことによつて制約される。自生的に經過するこのやうな過程——一方には少數者の手への富の集中・集積、他方には多數の生産手段なき労働者、少なくとも賃銀

勞働に従事せざるを得ない働きの造出——を促進するのがとりも直さず強力でありゲヴァルトである。ゲヴァルトは一定の經濟的基礎に立脚し、それに規定されて初めて「經濟的力」として作用するものである。生産手段の資本主義的な分配、資本主義的所有關係が生産の歴史的発展の所産であつて、單なる強力の結果ではなく、ゲヴァルトはここでは自生的過程の促進、「温室的育成」の契機に外ならずして、過程の原因や出發點ではないといふこと、資本主義的所有關係の發生は本來的には封建制の胎内における商品生産の發展の自然的結果であり、生産の内在的發展を本來の原因に持つてゐるといふことは、疑ふことの出来ない歴史的事實である。

そこで、階級の正しい唯物史觀的規定に當つては、單に生産物の分配——収入の源泉——や生産手段の分配のみを以つて指標とすることは許されない。生産物の分配は生産手段の分配から歸結されるものであるが、後者はまた生産の發展の結果である。生産手段の分配が階級關係の特徴付けにおいて如何に決定的な指標であるにせよ、それは生産そのものから切離されて考察されるときにはカウツキー流の強力説への偏向を廻避することが出来ない。ところで生産手段の分配を生産そのものの發展の所産として考察することは、かかる分配の基礎に社會的分業、社會的勞働組織を置くことを必要とする。例へば資本主義の場合について云へば、封建的自然經濟は農業からの手工業の分離、農村からの都市の分離、商品生産の發展に伴つて分解し、商品生産に基く商業資本の發展を通して最初、自生的に生産手段の資本主義的な分配が發生し、進行する。奴隸所有の發生の場合でも、牧人種族と農業種族との間の交換が種族的共同體内部の交換を、そしてそれを通して内部の社會的分業を發生、發展せしめ、共同體内部の矛盾が發展したことが、その原因であつた。この矛盾は、社會的分業の發展と共に發展した生産力によつて規定されるところの、勞働力

に對する需要の増大と、それに應じ得ない共同體的生産關係との間の矛盾であるから、それは奴隸所有を制約し且つそれによつて制約される私有財産の發展によつて止揚された。カウツキーのやうに共同體内部の矛盾を否定し、一つの種族による他種族の征服が生産手段の分配を規定するとするならば、たとへ彼が征服の經濟的條件について云爲しても、それは單なるフラーゼにすぎない。

このやうに、所有關係としての階級關係の發生、發展、止揚の基礎に社會的勞働組織を置かなければ、生産手段の分配を生産から切離してしまふことになる。そこで、社會的勞働組織を階級關係、従つて生産關係における基礎的なものとする史的唯物論の見解と、企業内の勞働組織がかかる基礎であるといふブハーリンの命題との相異を明白ならしめるために、この二つの勞働組織の差別および相互聯關について一言しなければならぬ。企業内又は企業結合内の分業、勞働組織は、すでに前章で説明した(註一)やうに、基本的には技術、生産の技術的過程によつて規定されながらも、同時に所有關係を反映し、それによつて一定の社會的質を賦與されるものである。で、それは決して自分の側から生産關係に社會的質を賦與するものではない。生産關係の社會的質の特徴付けにおいて最重要な標幟たる生産手段の分配は社會的勞働組織の基礎の上に起るものであつて、ブハーリンの言ふやうに生産の技術的過程、即ち企業内の勞働組織によつて規定されるものではない。企業内の分業は却つて元來社會的分業を前提とするものである。だから例へば企業内の分業、勞働組織が社會的勞働組織を規定し、後者が所有關係を規定する、といった風な見解は依然としてブハーリン式の技術主義である。マルクスは「マニユファクチュア的分業はすでに一定の發展度まで成熟した社會内部の分業を必要とする」と云ひ、その後で「逆にマニユファクチュア的分業は反作用的にかの社會的分業を

發展せしめ、多樣化せしめる」と述べてゐる。また彼は「資本主義的生產様式の社會においては社會的分業のアナキーとマニユファクチュア的分業のデスポティーとが相互に制約し合ふとすれば、職業の分化が自然生的に發展し、次に結晶して法律的に固定せしめられる従前の社會形態は、これに反し、一方では計畫的な、そして權威に基く、社會的勞働組織の圖像を示し、他方では作業場内部の分業を全く排除するか、又はただ微小な規模においてのみ、又はただ散在的且つ偶然的にのみ、發展させるものである」と書いてゐる(註二)。かくて今や技術的過程、企業内の勞働組織から所有關係を導き出すことの誤謬は明白である。資本主義社會における、企業内の勞働組織の計畫性と全社會内部の分業のアナキーとの間の矛盾は、生産の技術的過程が社會的勞働組織を規定するとするならば不可能なはずである。企業内の勞働組織は社會的分業を前提とするが故に、後者を、後者の中に貫いてゐる所有關係を反映するのである。

(註一) 前章(二三二—二三五頁参照)でブハーリンの見解の批判に當つて、企業内の勞働組織と所有關係の關係について語つた場合、社會的勞働組織については特に語らなかつた。そこでは、ブハーリン批判に當つては、勞働組織といふ表現をブハーリンの意味に、即ち企業内の組織の意味に用ひ(二三二—二三五頁)、それ以外の場合には企業内の、および社會的の、兩様の勞働組織の意味に用ひた(二三六—二三七頁)ために、讀者に曖昧な表象を與へたかもしれない。生産手段の分配が生産の發展の歴史的結果であるといふテーゼも、社會的分業の契機を無視するならば單なるフレーゼたるにとどまるであらう。そこで、今こゝで本文の中で述べてゐることは、前章の生産關係に關する説明の補足ともなるものである。

かやうにして階級の規定に當つても、この規定において決定的な徴表として役立つ所有關係は、社會的勞働組織の基礎の上で、それに包括せしめられて、考察されなければならぬ。何故なら、所有關係における階級的アンタゴニズム、生産手段の分配上のアンタゴニズム、の各々の特殊な歴史的形態は、それら一定の社會的勞働組織を基礎とし、同時に、その中に包攝され、——分配は生産の要素であるから、——かくして生産關係における基本的なものである。社會的勞働組織、生産の社會的體制の中にそれらの歴史的な階級的アンタゴニズムを貫徹させるものだからである。生産物の分配も勿論、階級關係を表現するが、それは所有關係から必然的に歸結されるものである。そして階級關係の本質を成す人間間のアンタゴニズムは經濟的には *Ausbeutung* の中に、收取の中に直接に表現される。階級の科學的な規定は、これらすべての事態を顧慮した上で初めて與へられる。この點からみて最も満足な規定は次の如きものである。

「階級とは、歴史的に規定された社會的生産體制内におけるその地位により、生産手段に對するその關係（大部分は法律により確保され定式付けられてゐるところの）により、社會的勞働組織内におけるその役割により、従つて社會的富の中、その處理する分前の獲得様式や大いさにより、互ひに區別されるところの大なる人間諸グループの謂ひである。階級とは、一定の社會經濟のウクライド内における地位の相異のおかげで、一つが他の勞働を擅有し得るといふやうな人間諸グループのことである」(註)。

(註) レーニン「偉大なるイニシヤチヴ」

これを要するに、階級の存在は、一定の歴史的發展段階上の社會的生產體制内における人々の地位の相異を第一の前提とするもので、かかる相異は生産手段に對する人々の關係の相異の中に、即ち生産手段の分配様式の中に、決定的な徴表を持つものである。そこで、一方にはすべての生産手段又は基本的な生産手段を有しない人間グループと、他方にはすべての、又は基本的な生産手段の獨占的所有者のグループとの存在が、あらゆる階級的社會構成の一大特徴となるわけである。だから「社會階級とは、生産において同一の役割を演じ、生産過程において他の人々に對して同一の關係にある人々の總體であつて、その際、これらの關係はまた物のうちにも表現される」(註)といふブハーリンの定義はマルクス主義的でない。かやうな定義は階級の存在の歴史的性質を無視した非歴史的、抽象的なものである。それは階級の無い社會にも適用出来るやうな一般的な規定である。またそれはアンタゴニズムの契機を見落してゐる點でも甚だ不充分である。ブハーリンは階級の存在の基礎には生産手段の分配の一定の様式が横はつてゐることを指摘してゐるとはいへ、彼はこれを階級關係の特徴付けにおいて本質的な契機と見做さず、階級の規定の中に採り容れない。で、彼によれば、人々の階級的差別は、生産において演じる彼等の役割の相異によつて規定されるのであるが、生産におけるかかる役割の相異といふのは、職業の差別ではなくて、「指揮する者と服従する者」の區別に外ならない。彼は生産における指揮と服従を階級關係の特徴付けのための人間間の「基本的な區別」と呼んでゐる。

(註)「唯物史觀」(白揚社本)四八五頁以降參照

生産における指揮と服従は階級關係の規定において基本的なものではなく、むしろ生産手段に對する人々の關係の相異から出てくる派生的なものである。それも、單に指揮と服従といふだけでは、未だ階級關係の特徴付けには役立た

ない。原始コンミニズムの社會においても、經驗ある氏族の長老は生産——例へば狩獵——において未經驗な青年を「指揮」した。階級關係の特徴付けに當つては、單なる指揮でなくてアンタゴニスティッシュな關係の一要素としての指揮と服從の關係を念頭に置かなければならない。

ところでこのアンタゴニズムが *Ausbeutung* の關係の中に直接に表現されることはすでに述べた通りである。收取は、やはり生産手段に對する關係の相異から派生するものではあるが、階級關係の規定において本質的に重要な契機を成すものである。この契機なくしてはアンタゴニスティッシュな關係は何ら明白に把握せられない。

生産物の分配におけるアンタゴニズムは收取の具體的形態として、社會的生產體制、社會的勞働組織における人々の地位のアンタゴニズムから派生する契機である。それは、生産手段を獨占し、従つて生産において支配する階級は餘剰生産物に對してもまた支配權力を持つといふ事實から歸結される。封建社會においては餘剰生産物又は餘剰勞働は地代の形態をとり、資本主義の下では餘剰生産物は利潤として資本家の収入となる。ここでは勞働者は自己の生産物の一部分、即ち必要勞働の生産物を、賃銀の形態で資本家から受取るのである。ところで生産物のかかる分配は元來、生産手段の分配の結果であることは再三述べたが、それは決して單に受動的な結果ではなく、生産手段の分配からの派生物であることによつて、同時にそれに反作用を及ぼすものだといふことをも指摘する必要がある。利潤の獲得は資本家の地位を確保し、その蓄積は彼の手中への生産手段の一層の集中・集積を可能ならしめる。これに反し、勞働力の再生産、勞働者の生計に必要なより以上の生産物に相當しない賃銀は、勞働者に致富の可能性を與へず、勞働者としての彼の地位の固定化、再生産の契機となるものである。このやうにして生産物の分配は、生産手段の分配

から派生すると共に、後者における現存する關係の維持、發展の契機として作用する。

**階級關係と
政治的關係**

階級の存在は以上で明白なやうに、生産關係の中に、社會の經濟的構造の中に根ざしてゐるもので、各々の階級は歴史上一定の社會構成におけるアンタゴニスティッシュな生産關係の項であり、大なる結節點であり、擔ひ手である。だから各々の社會構成における階級の歴史的に特殊な存在根據、生活條件、階級關係の具體的内容は經濟學によつて解明される。この意味で、マルクス以前の學者、例へばフィジョクラートやスミスやリカードの經濟學說も、近代社會の階級關係に經濟學的解明を與へた。だが彼等は自己の時代の階級關係を自然的秩序として理解し、その歴史的の本質を把握しなかつた。資本主義社會における階級關係の餘すところなき基本的分析を與へたのは「資本論」である。

だが階級關係は經濟の中に根ざしてゐると云つても、經濟上の關係に盡きるものではあり得ない。生産關係は一切の社會的關係における基本的なものであり、後者の質を規定するものであるから、階級關係はあらゆる社會的關係に浸透する。

ここで何よりも先きに擧げられなければならないのは政治上の關係である。元來、階級關係こそは政治的關係を産出するものである。で、それは政治的關係への反映においては、政治上の支配・服従の關係となつてあらはれる。經濟上において支配する階級はそのことによつて同時にまた政治上における治者階級である。このやうな事實は經濟上において收取される階級（奴隸、農奴）の政治的無權利を特徴とした古代社會や封建社會においては全く明白に、露骨にあらはれてゐる。資本主義社會では勞働者も「人權および市民權」を享有し、「理想的」な場合には法律上では

資本家と平等であるから、階級的の上位・下位の關係は消滅してゐるかの如き………する。それにも拘はらず、近代社會においてブルジョアジーが、その代表者たる政黨が、政治上の治者となつてゐるといふことは、何人にとつても明白である。法律上の特權や身分上の差別がなくとも、「金が物を云ふ」資本主義社會ではブルジョアジーは當然にさうならざるを得ないのである。

同時に、被收取階級の運動も………をとり、しかもこの形態において最も先端的な表現を持つものである。スパルタクスに指導された十五萬の奴隸は三ヶ年にわたつて………（紀元前七三―七一年）。封建的中世の歴史が農民一揆をもつて綴られた歴史に外ならぬことは如何なる史家も認めざるをえなくなつてゐる。ヨーロッパにおける「農民戦争」はその典型的なものである。日本においては、足利幕府の衰頹期における土一揆から戰國時代の一向一揆を経て徳川幕府の確立期における島原一揆に到るまでの時代と、徳川幕藩封建制の後期から明治初年に到るまでの時代は、特に瀕繁な農民一揆をもつて彩られてゐる。ブルジョア社會においては、ブルジョア側の側にも、労働者の側にも、その利害を代表する政黨が組織され、種々の仕方をもつて互ひに争つてゐることは吾々の日常の見聞に屬してゐる。政黨とはクラスの指導的部分のことである。もちろんこのことは、すべて政黨と名乗るものが眞實にその名稱に價するものだといふことを意味しない。で、個々人の政治的活動について見るならば、すべてのブルジョアが一致し、すべてのプロレタリアが一致するのではない。自己の階級に反して他階級の利益に奉仕する個々の人間は常に存在し、かかる人々の政黨もその限り存在する。しかし全體としての階級については、さういふことはあり得ない。あらゆる階級は全體としては、自己の利益に反する行動をとるものではない。そしてこの全體としての階級

の利益を代表する政黨は存在し、それが結局、その階級の最も有力な政黨となる。ブルジョアジーによつて見棄てられるブルジョア政黨もあるのである。しかし乍らブルジョアジーの特徴は、多くの場合、幾つものフラクションに分裂しており、そのために全體として単一な政黨によつてその利益が代表されないといふことである。これらの點は、次の節で、資本主義社會の諸階級について述べる際に、明白になるであらう。

第四節 現代社會の階級

基本的階級

資本主義社會における基本的階級はブルジョアジーとプロレタリアートである。資本主義的生産様式の矛盾はこの兩者の間の矛盾となつてあらはれ、その展開を通して發展する。ブルジョアジーはプロレタリアートなくしては存在し得ず、逆にブルジョアジーなしにはプロレタリアートはプロレタリアートたることをやめる。兩者は交互に制約し、矛盾的な統一を形成する。一般に辯證法において統一、安定、靜止は相對的であり、矛盾、抗爭、運動は無制約的であるのと同様に、ブルジョアジーとプロレタリアートの統一は相對的であり、矛盾は無制約的である。だからこの矛盾はいつまでも統一の枠の中に安住することは出来ない。そして矛盾の止揚は矛盾の一層の展開の結果であつて、矛盾をいつまでも統一の枠の中に押し籠めて置くことによつて可能なのではない。その際矛盾の發展を推し進めるものは……であり、これに反し統一を固執し、矛盾の積極的展開の代りにその糊塗に努めるものは……である。つまり、ブルジョアジーとプロレタリアートの……において、前者はそ

の肯定的要素であり、後者はその……………である。

「プロレタリアートと富は對立物である。それらのものはかかるものとして一つの全體を形成する。それらのものは私有財産の世界の二つの姿容である。問題なのは、両者が對立において占める一定の地位である。それらのものを一つの全體の二つの側面なりと説明するのは充分でない。

私有財産は、私有財産としては、富としては、自分自身を、従つてまたその對立物たるプロレタリアートを保持すべく餘儀なくされてゐる。それは對立の肯定的側面であり、自己満足せる私有財産である。

プロレタリアートは、反對に、プロレタリアートとしては、自分自身を、従つてまた彼を制約してプロレタリアートたらしめる……………、餘儀なくされてゐる。それは對立の否定的側面であり、その自己不安であり、解消された、且つ自らを解消する私有財産である」。

(註) 「神聖家族」第四章中の「ブルードン」といふ節

マルクスのこれらの言葉は、抽象的な形式においてではあるが、ブルジョアジーとプロレタリアートの本質を語つてゐる。

ブルジョアは労働者なくしては利潤を獲得し得ず、ブルジョアとしての生活を立てて行けないから、ブルジョアジーは餘剩價値の生産のための社會的條件たる資本主義的生産關係の維持を固執し、その限り對立の肯定的、保守的方面を代表する。プロレタリアートが擡頭し、ブルジョアジーに反對して進出して以來、特に生産力の發展が益々資本主義的生産關係と強くコンフリクトするに至つて、ブルジョアジーの保守性、反動性は全く明白にあらはれる。しか

し乍ら、ブルジョアジーも嘗つては進歩的であつた。

ブルジョアジーは、初め、封建制の下では、都市における高利貸^{II}および商業資本の代表者であつた。封建的關係の下で、彼等は、商業の發展に伴つて生長し、西ヨーロッパでは、發展した商業都市は封建領主から獨立な自治都市（それはコンミュニオンと呼ばれた）を形成した。封建國家からブルジョア國家への發展過程において、その必然的な一環として、封建的モナルヒーと封建領主の鬭争、前者の權力の増大による絶對的モナルヒーへの推移が見られるが、封建領主の反對勢力たるブルジョアジーはかかる推移過程にあるモナルヒーの支柱として役立つた。そして封建領主乃至貴族の完全な没落はブルジョアジーを排他的な支配階級たらしめ、この過程において絶對的モナルヒー自身もブルジョアジーに對するその相對的獨立性の基礎でもあつた封建貴族と運命を共にする（フランスの如く）か、それともブルジョア的なモナルヒーに轉化するかであつた（その典型はイギリス）。ブルジョアジーの生長のこのやうな過程について、マルクス、エンゲルスは次のやうに書いてゐる。「封建領主の支配下における被抑壓身分、コンミュニオンにおける武備ある自治聯合體、ここでは獨立な都市共和制（イタリーとドイツ——筆者）、かしこではモナルヒーの納稅義務ある第三身分（フランス——筆者）、次にマニユファクチュア時代には身分的又は絶對的モナルヒーの下で貴族に對する反對勢力、そして大モナルヒー一般の主要なる基礎、最後に彼等は大工業と世界市場の確立以來、近代代議制國家において排他的な政治的支配を獲得した」（註）。

（註）「賃労働と資本」レクラム版附録一〇五頁

ブルジョアジーのこのやうな政治的前進の基礎を成したものは、小商品生産からマニユファクチュア、後者から大

工業への産業の發展である。資本主義的生産のかかる發展過程において、高利貸商業資本は産業資本に轉化し、商人の中から産業ブルジョアジーが生長する。封建的勢力に對するブルジョアジーの優位の確立、そして遂にはその排他的地位は、商人の産業ブルジョアジーへのかかる轉化、後者の生長の結果である。それで、ブルジョアジーは、封建的勢力に對して、發展途上の生産力、新たな生産様式を代表して闘ふ限りでは、進歩的役割を演じた。商品生産の發展、特にマニユファクチュアの發生からブルジョアジーの政治的支配の確立、ブルジョア・デモクラシーの確立に至るまでの時代は、資本主義の生産力の嵐の如き發展の時代、資本主義の上向的發展の時代であり、その限りブルジョアジーは未だ大なり小なりの程度に相對的進歩性を持つてゐた。かやうな時代は世界史的には一八七一年をもつて終りを告げてゐる。この年に、ドイツはブルジョア國家として曲りなりにも（即ち半封建的要素との妥協をもつて）成立し、一七八九―九三年に大打撃を受けつつも尙ほ殘存してゐたフランスにおける封建的乃至半封建的勢力は決定的に清算され、現在まで續いてゐるブルジョア共和國がそこに樹立されたのである。イギリスにおいては、ブルジョアジーは一六八九年（名譽革命）以來、支配階級の公認された一員となつたが、産業ブルジョアジーが貴族・地主（當時のイギリスの貴族・地主はブルジョア化してゐたとはいへ、彼等の利益の擁護のための穀物に對する保護關稅は産業の一層の發展にとつて障害であつた）に對して優位を占めたのは一八四六年（穀物條例廢止）以來である。

上昇期のブルジョアジーは、かやうに封建的乃至半封建的要素の對立物としては、何らかの程度において進歩的であり得た。だが、その進歩性は決して無制限でなく、その限界は、彼等が人口中の少數者たる有産者であり收取者であるといふ事情によつて制約されてゐた。ブルジョアジーと、彼等によつて收取される労働者との間にアンタゴニズ

ムが最初から横はつてゐることは云ふ迄もない。その上に、彼等は有産者としては、大所有者としては、當然に都市小ブルジョアジーや農民のやうには進歩的であり得ない。小ブルジョアジーや農民（特に中農）は經濟上の不平等に反對して平等主義的な傾向を取るものである。それは單に政治上の平等のみでなく、また財産の平均化、土地均分等の思想ともなつてあらはれる。かやうな傾向は何ら社會主義的でなく、本來的にはブルジョア・デモクラシーの最も徹底した型であるとはいへ、それはブルジョアジーの特権——その唯一の特権たる財産上の特権——を打破するものであるから、到底彼等の賛同するところではない。

従つてブルジョアジーはブルジョア・デモクラシーの運動において最も首尾一貫した態度を取り得る階級では斷じてない。ブルジョア・デモクラシーの運動において、労働者、都市庶民や農民はつねにブルジョアジーより先きへ行き過ぎる。だから、ブルジョア・デモクラシーの運動においてヘゲモニーはブルジョアジーにある、少なくともブルジョアジーの進歩的時代にはさうであつた、抔と考へるのは誤謬である。周知の如く、メンシェヴィズムの一大特徴は、ブルジョア・デモクラシーの實現のための運動はブルジョアジーに指導されるものと見做し、かかる運動においてブルジョア政黨と提携したことにあつた。然るに實際にはこの運動に参加するものの中、ブルジョアジーと労働者、都市庶民、農民の間には不一致があり、それは特にブルジョアジーの對立物たる労働者が獨自な要求をもつて進出するに到つて一層明瞭となり、ブルジョアジーの進歩性の限界、プロレタリアートに對するその反動性はいよ／＼明確にあらはれる。だからブルジョアの進歩性の現はれである自由主義は、つねに何らかの程度に不徹底であり、封建的支配に對して妥協的である。

マルクス、エンゲルスは一八四八年にドイツの自由主義ブルジョアジーが人民を裏切つてアブソリュチズムと妥協したことを痛烈に指摘し、レーニンはロシアのデモクラシー運動において自由主義者が甚だ卑屈なものであることを暴露し、彼等と提携するメンシェヴィキーに反対して農民デモクラシーとの結合を固執した。このやうに、労働者階級が独自の利害を意識し、独自の進出を企てない時代、例へば十六世紀のドイツ農民戦争、十七世紀のイギリス大革命、十八世紀のフランス大革命においてもすでに自由主義はその限界を示した。マルクス、エンゲルスはドイツ農民戦争時代における封建制に対する反対派の中に「ルータルの騎士的反対派」と「庶民的」ミュンツェルの反対派」を區別し（註一）、前者の妥協的、裏切的性質と後者の首尾一貫したラディカルなデモクラシーを指摘したし、またエンゲルスは、十七世紀中葉のイギリスにおけるクロムウエルの共和國の建設に當つて運動のエネルギーを提供したものは農民（特に中農^{ヨマンリー}）であり、「何れにしても紛争が最後の解決にまで戦ひ抜かれたのは……たゞこのヨマンリーと都市の庶民的要素の參與によつてであつた」と云つてゐる（註二）。フランス大革命におけるブルジョアジーについて、レーニンは「フランスにおける自由主義ブルジョアジーは、すでに一七八九—一七九三年の運動において徹底的なデモクラシーに敵意を示し始めた。……そして労働者階級を先頭とするフランスのデモクラシーは、自由主義ブルジョアジーの動搖、裏切」、反動的態度に對抗して、困難な一聯のカムパニヤの後にレパブリックを建設した、と書いてゐる（註三）。フランス大革命におけるジヤコバン黨は小ブルジョアジーの黨派であるが、それは元來「……………に依據せる黨派」（エンゲルス）であつた。

（註一） エンゲルス「ドイツ農民戦争」、エンゲルスのラツサールへの手紙（一八五九年五月十八日付）およびマルクスのラツサ

ールへの手紙（一八五九年四月十九日付）参照。「庶民的」ミユンツエルの反對派」を反動的と認め、「ルーテル的」騎士的「反對派」を進歩的と見做し、騎士の指導者フランツ・フォン・ジツキンゲンの禮讚のために戯曲を書いたのがラツサールであつた。ところでレーニンの云つたやうに、現代に適用していへば「ルーテル的」騎士的」とは「ブルジョアの」地主的」といふことであり、「庶民的」ミユンツエルの」とは「労働者的」農民的」といふことであるから、ラツサールがプロシヤ地主の代表者たるビスマルクと妥協したのは決して偶然でない。エンゲルスはなほ、ブルジョア・イデオログたるルーテルと異つて、思想史において全く黙殺されてゐるトマス・ミュンツエルがその時代の水準を遙かに越えた思想家であつたことを指摘してゐる。ミュンツエルは僧侶であつたに拘はらず、彼の世界観は無神論に接近した。

（註二） エンゲルス「空想より科學へ」英語版への序文

（註三） 「選舉戦における原則的問題」

右のやうな事實から、ブルジョア・デモクラシーの純粹な形態の實現はブルジョアジーによつてでなく、都市庶民（後には主にプロレタリアート）と農民によつて成就されるといふこと、しかもかかるデモクラシーの實現はブルジョアジーの利益の障害物たる封建的、半封建的要素の清算に外ならぬ故、結局においてブルジョアジーの利益に奉仕したといふこと、が明白となる。だからエンゲルスは「當時收穫さるべく成熟してゐた勝利の果實がブルジョアジーによつて收得されるにさへ、變革が著しく目的以上に行き過ぎることが必要であつた、——フランスにおける一七九三年とドイツにおける一八四八年もまた正にかくの如くであつた。それは實際ブルジョア社會の發展法則の一つであるやうに見える」と書いた（「空想より科學へ」英語版への序文）。エンゲルスがはつきり定式付けたブルジョア社會のこ

の「發展法則」の把握は、後にロシヤのブルジョア・デモクラシー運動において、「都市の庶民的要素」(プロレタリアート)と農民の提携、いはゆる「左派プロック戦術」となつてあらはれた。

かやうにしてブルジョアジの進歩性には初めから限界があることが判明する。しかし乍らこの限界は固定不變のものでなく、プロレタリアートの生長に比例して次第に明瞭に發揮されてくる。一八四八年と一八七一年のフランスではブルジョアジはプロレタリアートに對して徹底的に反動性を暴露した。帝國主義時代、特にアルゲマイネ・クリーゼの時代においてはブルジョアジは一切の進歩性を失ひ、全く反動的なり、自由主義はそれ自身反動化するか、反動に對して無力になるかである。現在、ドイツやイタリーに見られるファッシズムは、ブルジョアジの反動性をこの上もなく露骨に體現してゐるものである。

ブルジョアジが資本主義社會における治者階級であるといふことは今日では一般の常識であるが、そのブルジョアジの中には種々の分派があることに注意しなければならない。自由競争に基く生産のアナーキーを止揚し得ないブルジョア社會においては、ブルジョアジ内部の不平等や競争、軋轢がつねに存在する。例へばナポレオン没落後のフランスにおいて、ブルボン王朝の支配は貴族的反動を意味し、産業ブルジョアジおよび人民は抑制を受けたが、金融ブルジョアジはさうでなかつた。一八三〇年におけるブルボン王朝の没落は、その金融ブルジョアジをさへも反對派にしてしまつたことによつて一層早められた。ところで一八三〇年から四八年に至るまでのモナルヒーは、「金融貴族」の支配を意味し、四八年の事件の出發點においてはこの金融ブルジョアジに對する産業ブルジョアジの反對が一定の役割を演じた。大體において、ブルジョアジの中、政權に參與するのは初めは極く上層の部分で

あり、次第に一聯の抗争（フランス）や或ひは穏和な選舉權擴張運動（イギリス）等によつて、ブルジョアジーの多くの部分が政權へ編入される。その際、かかる抗争や運動において物理的エネルギーを提供し、それによつてブルジョアジーの治者階級としての地位を確立せしめるものが人民（労働者と農民）であつたといふことは、特に資本主義の上昇的發展期には不可避的だつた歴史的運命である。

ところでブルジョアジーが全體として治者階級を構成し、「排他的な支配」を獲得してゐる場合（歐米資本主義國の如く）でさへ、ブルジョアジー内部の競争の故に、互ひに競争する種々のブルジョア分派がある。それは經濟上では異つた資本家グループ間の競争（例へばトラスト間の競争、トラストとトラスト外の資本家グループの競争）を反映し、政治上ではより反動的なものとなり自由主義的なものに區別される。しかし乍らプロレタリアートの前にはこれらの分派間の不一致は消滅する。そしてブルジョアジーが全體としてはファッショ化しつつある現在においては、自由主義的分派もファッショ化するか、又は極めて無力になるといふことは、今日の資本主義諸國の政情がこれを示してゐる。

ブルジョアジーをかやうに反動化せしめるものは、……………である。プロレタリアートが未成熟で、未だ獨自な要求を以つて進出しなかつた時代には、ブルジョアジーは封建的勢力に對して一層勇敢であつた。しかし乍ら、産業の發展と共に、即ちまたブルジョアジー自身の勢力の増大と共に、プロレタリアートも生長する。

プロレタリアートは離村せる農民、解體したツンフトの職人や徒弟、零落した小商人や手工業者等から生成する。「前期プロレタリアート」といふのは都市における、やがて賃銀労働者たるべき運命にあるこれらの庶民的要素のこ

とである。

プロレタリアートは最初は小商品生産における賃銀労働者として、分散的に生活し、次にマニユファクチュアから大工業の時代にかけて益々團結の傾向を取る。

最初是个々の労働者がその主人・資本家と馳引し、次に一工場の労働者が、そして一地方における同一産業部門の労働者が、資本家に對する運動を開始する。しかしこの段階においては彼等は全體として統一されず、依然として分散してゐるから、政治的には封建的要素に對するブルジョア・デモクラシーの運動以上に出ることは出来ない。彼等の運動の目的は未だ經濟の範圍に止まり、運動そのものも自生的であつて、明瞭な政治的目標、目的意識を有しない。

だが産業の一層の發展の結果、プロレタリアートが數の上で増加し、同一の作業場や地域に益々密集し、同時に、生産過程の機械化によつて彼等の間の技能上の差別から來る待遇上の差別が小さくなり、

.....かやうに資本主義的生産の發展は同時にプロレタリアートの生長を意味する。

プロレタリアートはブルジョアジーと共にブルジョアジーの舊い反對要素（封建的勢力）に反對して進出する。そして彼等はこの進出、即ちブルジョア・デモクラシー運動において最もラヂカルな要素である。だがブルジョアジーの舊い反對要素の清算による、前者の地位の確立は、決してプロレタリアートをより不利な地位に置くのではなく、却つてそれはブルジョアジーに對する彼等の運動をより有利に導くための必然的な條件である。そして資本主義の生産力と生産關係のコンフリクトが現存し、従つてこのコンフリクトの解決のための客觀的條件が現存する時代には、

プロレタリアートが有力に参加するブルジョア・デモクラシー運動は直ちにかかるコンフリクトを、従つて資本主義的生産のアンタゴニズムを解決するやうなところまで進んで行く可能性を與へられるのである。

プロレタリアートが分散的で、その運動が未だ自然生長性の範圍を出ないときには、彼等は客觀的に見れば、それ自體においては階級であるが、未だ自らを特殊な階級として把握し、自己の特殊な利害を明確に意識しない。かかるとき、プロレタリアートは「それ自體における階級」（又は即自の階級）と呼ばれる。ところが自然生長性から意識性の段階に入り、自己の特殊な利害を代表する主體をも持つに至るとき、それは「それ自身に對する階級」（又は對自の階級）と云はれる。

プロレタリアートの即自から對自への轉化は産業革命の過程において進行し、帝國主義時代にはすでに彼等の主體的條件は著しく成熟する。封建制の下では農民は、或る程度に發展した條件の下では、全體としては地主に對立しつつも富農、中農、貧農、日雇労働者乃至作男への分解を内包し、ツンプトや手工業の労働者の内部にも手工的熟練度の大小に應じて一聯の階層が構成され、またブルジョアジーの内部に種々の分派があるのとは反對に、プロレタリアートは企業内においても、企業間においても、國民内部においても、國民間においても、何ら利害の不一致を有しない。従つてプロレタリアートが「それ自身に對する階級」として自らを結合するとき、その結合の可能性は深さにおいても廣さにおいても歴史上のあらゆる階級を凌駕する。だがそのやうな深く且つ廣い結合がブルジョアジーの側から絶えず攪亂作用を受けなければならぬこともまた當然である。

…で、かかる企ては、單なる抑壓の中にあらはれるのみでなく、また特徴的には、労働貴族（乃至組合官僚）の養成と、労働者層へのブルジョア的世界觀の浸透との中にあらはれる。一少數の最富裕國の獨占的高利潤を意味する帝國主義は、プロレタリアートの上層を懐柔するための經濟的可能性を生み出し、且つかくして日和見主義を扶養し、形成し、且つ強固にするのである」（註）。熟練労働者の一部がかかる「上層」として殖民地や隸屬國からの過大利潤の小部分の分配にあづかり、彼等の中から多くの組合幹部が出され、それがブルジョアの労働政策の公然な、或ひはより屢々蔽はれた支柱となる。この點で最も典型的なのはチャーチスト運動の死滅以後のイギリスであるが、現在ではかやうな現象は何處でも、何人にも疑へない程顯著である。今日のソーシャル・デモクラートは、ソーシャル・ファシストと呼ばれてゐるだけあつて、この種の労働貴族であり、ブルジョアの労働政策の主要な支持者であると見做されてゐる。

（註）レーニン「帝國主義」岩波本一五〇頁

だが労働者の「上層」が如何に非労働者的な方針や觀念を持ち込まうとしても、労働者層の内部にそれを受け容れるやうな條件が存在しなければ、かかる試みは何らの効果も持ち得ない。ところで労働者階級の内部には、いつも、ブルジョア的影響の媒質となるやうな層が存在するのである。ブルジョアジーとプロレタリアートは機械的に切離され、互ひに別世界に住んでゐる二つの生物種屬ではない。資本主義の發展は、自由競争から敗者となつて出て來る多數の小經營者のプロレタリア化を伴ふと同時に、それはまた斷えず新たな小經營者を造り出す（大工業に附屬する個々の部分作業を擔當する小經營、資本主義的家内労働等々）。そして「これらの新しい小生産者も同様に不可避免的に再

びプロレタリアートの部列へ投げ出される」のだから、「小ブルジョア的な世界觀が廣汎な労働者の部列の中へ次から次と侵入するのは、全く自然である」(註)。かくてプロレタリアートの中に不斷に小ブルジョアジーが這入つてくるといふことが、修正主義の發生、存続の階級的根元である。労働者運動が廣汎に展開されるにつれて、これらの小ブルジョアの要素も益々運動に引き込まれ、運動に對してプラスとなると同時に、その小ブルジョアの偏見から未だ抜け切るまでに訓練されない限り、不可避免的に修正主義の媒體となるのである。

(註)「マルクス主義と修正主義」

ところで、すべての科學的理論は客觀的現實を何らかの程度に反映しなければ、眞理として受け容れられはしないし、科學的形式を持つことも出来ないのだから、労働者層へのブルジョアジーのイデオロギー的影響としての修正主義も何らかの仕方で客觀的現實を反映してゐるはずである。吾々はすでに、哲學的觀念論は認識の一契機の絶對化から生ずるといふこと、理論上の誤謬は現象のあれこれの一面に執はれ、それを擴張し、絶對視することに根ざしてゐるといふことを見た。で、修正主義も、これを認識論的に考察するならば、矛盾に充ちた、多様なジグザグな資本主義の發展過程における一要素、一側面の過大視、誇張に基いてゐるものである。例へば社會發展における連續、漸次性の契機を絶對視するならばカント派社會主義やベルンシュタイン主義に、また後年のカウツキー主義の如きものが不可避免的に結論される。カウツキー主義は、初め意識的にはマルクスを信奉し、修正主義を一應は批判さへし乍らも、社會の漸次的發展の時代に生長したために、専らかかる發展のみに適應したタクティクを絶對視し、それ以外のものを非マルクス主義的と見做し、かくして遂に社會發展の飛躍的過程(一九一四年以來)に當面して適應的な態

度をとり得ず、全く破綻し、ブルジョアジートの御用理論となつてしまつたものである。これに反し社會過程における飛躍の契機を絶対視するならば、「左から」の修正主義（アナーキズム、アナルコ・サンチカリズム、極左的偏向）が生れてくる。「左から」の修正主義もやはりブルジョアの影響の現はれであり、焦燥にかられた小ブルジョアの急進主義である。それは社會運動における灰色の日常的「瑣事」を輕蔑することによつて、運動の進展を妨害する。

これらすべての、プロレタリアートに對して解體的に働く要素の存在にもかかはらず、プロレタリアートの「それ自身に對する階級」としての資格も益々強固となる。元來、それだからこそ、修正主義の培養もブルジョアジーにとつて必要となるのである。だが階級は誤謬を犯さない。全體としてはプロレタリアートはブルジョアジーの影響に身を委せてしまふものではない。だが全體としてのプロレタリアートが謂はば本能的に、自生的に、ジグザグをもつて進んでゆく途とその行方を、理論的に照明し、それによつて「無駄な」ジグザグや逸脱を廻避し、生みの苦しみを和げ、短縮するところに、いはゆる主體的條件の意義がある。

副次的階級

資本主義社會における副次的、從屬的な階級として、地主、小ブルジョアジーを擧げることができる。「理想的」な資本主義の下ではブルジョアジーとプロレタリアートといふ二つの階級が存立するにすぎないが、それはたゞ抽象的にのみ可能であつて、現實には他の階級も存在する。そしてそれは、資本主義的關係が未發達であるのに比例して、より顯著である。これらの階級について極く一般的な觀察を加へよう。

地主——地主は封建制の下では農民と共に基本的階級を形成し、排他的な治者階級として、特權身分である。だが資本主義社會では、地主はもはや身分たることを止め、そして結局においてブルジョアジーに對して從屬的な要素と

して治者階級の一部分を構成する。その場合、農業の資本主義化の程度の如何に應じて、ブルジョアジーに對する地主の從屬の程度にも相異が生じることが勿論である。

地主が資本主義的小作經營者から餘剩價值の一部分を地代として受取るまでに、農業が資本主義化してゐるところでは、地主は階級としての獨立性を失ひ、資本主義的農業家への寄食者、ブルジョアジーの謂はば油蟲の如きものとなるか、或は直接に農業經營者となる。ところで資本主義的地主と農業經營者および工業ブルジョアジーとの間には餘剩價值の地代への轉化の分の大小をめぐつて、また農産物の價格をめぐつて、利害の對立があらはれるとはいへ、ここではもはや地主は資本主義的生産様式を自己の生活條件としてゐるのだから、地主と借地農業家および工業資本家との間の利害の對立は決して資本主義の根柢に觸れるやうな深刻なものではない。だから地主と資本家の結合はプロレタリアートの擡頭と共に益々強固になり得るし、またなるのである。封建的地主が資本主義的地主に轉生するやうな場合には、封建的治者階級が依然として治者階級内において優位を保持しつつ、ブルジョアジーを治者階級の構成員に編入するのであつて、その反對にブルジョアジーが封建的土地所有を清算し、その後に出來た無数の小土地所有の中から資本主義的地主がブルジョアジーの謂はば派生物として生長して行くのではないから、そこでは地主と資本家の結合において前者が優位を占め、經濟の領域においては資本主義的生産が壓倒的となつても政治的上層建築においては半封建的要素が残存する。ブルジョアジー自身がそこでは地主氣質に教育されるのである。ユンカーが政治を牛耳つてゐた帝制ドイツはその好適例である。

更に、資本主義的生産が優位を占める社會において、地主が未だ封建的農業關係に依據してゐる國も少なくない。

さういふ國においても、帝國主義時代には、ブルジョアジーはもはや封建的農業の清算に利益を有せず、却つてプロレタリアートに對して地主と結合し、地主は地主で農民に對してブルジョアジーと結合しなければならぬ。ここからは従つて、政治上でも封建的なものが多く殘存する。特に、封建的農業關係が資本主義の存立の不可欠な一條件となつてゐるやうな場合には、かかる傾向は極めて顯著となる。そこでは、經濟上では、やはり資本主義が優越であり、地主も資本主義的工業の經營者乃至金利生活者の半面を持ち、封建的農業の中にも資本主義的要素が侵入するに拘はらず、農業における封建的關係が資本主義的生産の助長の契機であつた限り、かかる關係の維持は定言命令として要求され、それに關聯して上層建築の分野における封建的なものの力が極めて大である。

何れにしても、地主は資本主義社會において最も……な階級である。

ブルジョアジー、農民——資本主義は小商品生産から生長したものであり、それはかかるものとしては、一方では小商品生産。小經營を没落せしめ、他方では同じく不可避免的に小經營を自己の附屬物として産出する。そこで、かやうな小商品生産者の階級も存在するわけである。この階級は、その成員が一方では不斷にプロレタリア化し、他方では少數のものはブルジョアに「出世」し得るしまた得るといふ幻想を懷いてゐるために、極めて浮動的であり、政治的關係においても、獨立的に進出するよりは、むしろブルジョアジー乃至プロレタリアートの側に誘引される。これは外ならぬブルジョアジーである。資本主義の勃興期、産業革命開始以前には、小ブルジョアは都市において多數人口を占め、かなり重要な役割を演じた。彼等の下層は、やがて資本主義の發展につれてプロレタリア化すべきものであつて、その限り、職人、日雇労働者、浮浪者等と共に「都市の庶民的要素」を構成した。一七八九―九三年のフ

フランスや、一八四八年のドイツでは都市小ブルジョアジーは少なからぬ役割を演じ、特にフランスにおいてジャコブソン黨によつて代表された都市小ブルジョアジーは農民および一般に「都市の庶民的要素」（「前期プロレタリアート」）に加擔したものであつた。小ブルジョアジーは、小商品生産者・小經營者としては、商品生産の發展の桎梏となる封建的支配に反對し、小所有者としてはブルジョアジーの上層に對して反對的氣分を抱懷し、同時に小所有者なるが故に無所有なプロレタリアートと異つてやはり所有者的心理を持つものである。小ブルジョアジーにとつて特徴的なイデオロギーは、ルーソーにおいて明確にあらはれたやうな平等主義であり、ブルードンにおいて表現されたやうな、平等に細分された小所有の理想化である。このやうな事情のために、小ブルジョアジーは資本主義社會においてはブルジョアジーとプロレタリアートの間を動搖し、各々の場合に彼等がブルジョアジーとプロレタリアートの何れの側に傾くかは、この兩階級の勢力關係や政策によつて規定される。しかし乍ら資本主義の高度の發展が小ブルジョアジーにおける小所有の「理想」を幻滅せしめ、小ブルジョアジーの階級的獨立性の外觀が益々消滅し、彼等の大多數にとつては零落の脅威が現存してゐる現代においては、彼等はもはやブルジョアジーに引き寄せられるよりは、より多くプロレタリアートに對して同情的である。尤もその場合にも、彼等はその小所有者的心理と政治的意識の低さの故に、同時にファッシズムにも利用され得るものである。

資本主義社會においては、農村における典型的な小ブルジョアジーは中農である。中農は資本主義的農業の發展と共に大部分は半プロレタリア的な貧農に、そしてそれを経て更に純粹の農業プロレタリアートに零落し、小部分がブルジョア的な富農に「出世」する。

資本主義の下では農民は農業ブルジョアジー・富農（ブルジョア的要素）、小ブルジョア的な中農、半プロレタリア的な貧農および農業労働者に分化してゐて、決して一つの階級を構成するものでないこと、だが農村において封建的關係が残存してゐる限りでは、これらの分子はいづれも農民として、一つの全體的な階級を成すものであることは、すでに述べた通りである。これは換言すれば、ブルジョアジーに反対するプロレタリアートの運動に對しては、全體としての富農は反対し、全體としては中農は中立的であり、貧農と農業プロレタリアートは左擔するといふこと、だが封建的土地所有の清算が問題である場合にはこれらすべての分子は一致して出るといふことを意味する。農民は封建社會においては地主・領主と共に基本的階級であり、その内的分化にもかかはらず、その内部に漸次に生長するアンタゴニズムにもかかはらず、封建的地主に對してはやはり一つの階級を成すのだから、封建的土地所有に對しては全農民は一致した態度をとることが出來、そして封建的土地所有の解體の後に、初めてブルジョア的要素と半プロレタリア的乃至プロレタリア的要素との間のアンタゴニズムが農村における基本的なアンタゴニズムとしてあらはれてくる。それ以前には、それは封建制における基本的なものとしての領主と農民との間のアンタゴニズムに對して副次的なものでしかあり得ないのである。

封建的關係に對する鬭争、即ちブルジョア・デモクラシー運動においては封建制下の基本的階級としての農民の意義は極度に重大である。ブルジョアジーや「都市の庶民的要素」もブルジョア・デモクラシーの運動に参加し、就中後者はこの運動において最もラヂカルであるが、しかし産業革命以前の社會においてはこのやうな要素も人口中の多數を成すものではない。人口の多數を構成するものはそこでは農民であるから、農民がどの程度まで積極的に運動に

參加するかといふことが、デモクラシーの運命にとつて基本的に重要な意義を獲得する。ところで農民は封建制の下においては獨立な小國家とも云ふべき多數の領主・地主の所有地に定着せしめられてゐるが故に、全國的に統一された「それ自身に對する階級」となり得ず、またかやうな分散性のためにブルジョアジーや「前期プロレタリアートの運動への合流なしに、獨立的にデモクラシーを獲得し得るものでない。レーニンは現代プロレタリアートの勢力が「(1) 人數、(2) 國の經濟における役割、(3) 勤勞者大衆との結びつき、(4) その組織性に依存する」(註)ことを指摘してゐるが、正にこの組織性こそは封建時代の農民に缺けてゐたものである。で、封建制との鬭争において、農民は自由主義ブルジョアジー乃至は都市「下層民」(「庶民的要素」)に指導されるのが常である。しかし乍ら自由主義ブルジョアジーは農民が彼等の當面の目的以上に進出するときにはもはや農民の味方たることを止める。ところで農民が自由主義者を乗り越えてデモクラシーのラヂカルな實現にまで進んだのは、都市「下層民」と提携するか又はそれに指導された場合であるといふことは、前に書いた通りである。従つて、ブルジョア・デモクラシーの運動に參加するプロレタリアートの前には、一言でブルジョア・デモクラシーと呼ばれるこの潮流の中に自由主義と農民デモクラシーを區別し、デモクラシーの利益のためには後者と結びつき、且つそれを導くといふ課題が提起される。その意味で、ロシアのブルジョア・デモクラシー運動において、自由主義者との提携を主張したメンシェヴィキに反對したレーニンは、農民デモクラシーとの結合を主張し、勞働者と農民をその擔ひ手とするところのブルジョア・デモクラシーを自由主義から峻別し、それを單にデモクラシーと呼んだ。自由主義もまたデモクラシーではあるにせよ、それはブルジョアジーのものであるが故に不徹底であり、欺瞞的であつて、眞のブルジョア・デモクラシー

の名に價しないのである。従つて吾々が歴史研究に當つて、封建制下における階級運動、特に一口に反封建的と呼ばれる運動の中に、自由主義とデモクラシーのこの二つの潮流を區分することは（すでにエンゲルスが十六世紀のドイツ農民戦争についてやつたやうに）、科學的に極めて重要である。

（註）レーニン「ブハーリン轉形期經濟學へ評註」

資本主義社會においても、農村に封建的關係が残存してゐる限りでは、かかる關係に對しては、農民はその内部における階級的分化にも拘はらず、やはり一つの封建的階級の残存物として、共同の利害を持ち、そしてデモクラシーの利益のためにはここでもプロレタリアートとの結びつきが必要となることは云ふ迄もない。

だが農民はデモクラシーの實現、封建的農業關係の清算と共に、農業ブルジョアジーと農業プロレタリアートへの分解の傾向を示すから、またプロレタリアートはデモクラシーのレヂーム以上に出ようとするのだから、實現されたデモクラシーはただブルジョアジーをその階級的基礎に持つのみである。従つてブルジョアジーの全般的反動化の時代（帝國主義時代）にはデモクラシーの進歩性も凋滅するわけである。

インテリ
ゲンチャ

インテリゲンチャは資本主義社會において特に顯著な社會グループである。しかし乍らインテリゲンチャは一個の階級を構成するものでもなく、また一個の「社會層」を成すのでもない。多くのインテリゲンチは互ひに生産關係内における地位を異にしてゐるのである。インテリゲンチャとは、極く一般的に云へば、知的労働と肉體労働の間の分業が存在してゐる社會において、知的労働を専門とする者のことであるから、資本主義社會においては、技術家、事務員、官公吏、醫師、學者、ジャーナリスト、藝術家（俳優なども、高度な又は特殊な知能

を必要とするもので、やはりインテリゲンチヤである）、辯護士等々がこれに含まれる。

彼等の中の或るものは、資本家的企業に薄給を以つて雇はれ、餘剩價値の源泉として、労働者と同じく被收取者である。しかし乍らこの種の下層インテリゲンチヤによる餘剩價値の生産は社會の全生産に比較すれば甚だ小さなものであり、餘剩價値は基本的には肉筋労働者によつて創造されるといふ事實を變更するものではない。それに、インテリゲンチヤは、生産手段を所有しない點では労働者と同じであるとはいへ、彼等は資本主義社會では、非常に屢々、労働者に對抗する手段として資本家に利用される。労働過程において指揮する役割を演じる技術家の如きがそれである。近代國家において非常に多數な下級官公吏の如きものは、もはや生産から游離してゐるが故に、餘剩價値の生産者ではないが、やはりかかる手段であることは同様である。

上層の少數のインテリゲンチヤに至つては、もはや餘剩價値の生産者でもなく、その實現の契機でもなくて、専ら餘剩價値に寄食し、ブルジョアジーの一員として、高級技術家、政治家、大學教授、ジャーナリスト等々として社會生活の各分野においてブルジョアジーの意志を積極的に遂行するものであるから、そのブルジョア的階級性は一見して明白である。

俸給生活者でない「自由職業者」たるインテリゲンチヤは、經濟上では小ブルジョア・小經營者と同様であり、やはり資本主義の高度の發展に伴つてブルジョアとプロレタリア乃至半プロレタリア的要素への分化の傾向を示すものである。例へば一人立ちの開業醫が一方では大經營者（大きな病院の所有者）となり、他方では零落して俸給で病院に雇はれたり、また有力な俳優が劇團や撮影所の經營者となり、並の俳優が前者に收取される、等々。

以上は大體インテリゲンチヤをその經濟上の地位によつて分類したものであるが、これを更に別の方面から、即ち社會的役割の方面から觀察することが出来る。そのときにはインテリゲンチヤを企業におけるそれ、政治の領域におけるそれ、およびイデオログに區分することが出来る。そして特にイデオログについては、彼の經濟的地位が問題でなく、むしろ彼が如何なるイデオロギーを社會に廣めてゐるかといふことが、彼の階級所屬を規定する上に主要な標幟となる。何故なら彼はイデオロギーの發展、流布を社會的職分とするものだからである。マルクスやエンゲルスをプロレタリアートの思想家と呼ぶのは正にかやうな標幟によつてである。これに反しイデオロギーの處理を専門としない技術家や官吏等については、そのイデオロギー内容によつて階級所屬を決定することは出来ない。例へば辯證法的唯物論を抱持する高級技術家は、彼がプロレタリア的な立場から技術の資本主義的利用に反對して出ない間は依然として單なるブルジョア・インテリゲンチヤである。

このやうに、インテリゲンチヤは種々雑多な要素から成立するもので、決してまとまつた社會層（「中間層」といふやうな）や階級をなすものではない。ブルジョア・インテリゲンチヤもあり、小ブルジョア・インテリゲンチヤもあり、プロレタリア・インテリゲンチヤも存在する。もちろんブルジョア社會においてはプロレタリア・インテリゲンチヤは少數である。しかしこのことはインテリゲンチヤが原則的にプロレタリアートと別箇のものであり、プロレタリアート以外の階級のものだといふことを意味しない。周知の如く、ソヴェート聯邦において、舊時代のブルジョア・インテリゲンチヤを利用し、彼等をプロレタリアートの側へ「善導」すると共に、帝政時代のブルジョア・インテリゲンチヤの一部分の間に巢喰つてゐた反ソヴェートの氣分と、五ヶ年計畫の進行と共に不可避的となつた大量の

技術幹部の造出の必要とに鑑みて、「労働者階級の生産技術家的インテリゲンチヤ」の養成が叫ばれたことは、とりも直さずインテリゲンチヤがプロレタリアートの階級にもあり得るし、またなければならぬことを證明するものである。インテリゲンチヤは何らブルジョア的な範疇でなく、ブルジョアジーにのみ所屬するものではない。

「もし諸君がインテリゲンチヤをプロレタリアートや農民に對置するならば、即ち諸君はインテリゲンチヤなるもの下に特定の社會層を考へ、賃銀労働者や農民の社會的地位が一定であるのと同様に一定の社會的地位を占める人々のグループを考へてゐるわけである。だがロシアのインテリゲンチヤはかかる層としては正にブルジョア的および小ブルジョア的インテリゲンチヤである。……ところが諸君が未だ何らの一定の社會的地位をも占めてゐないか又はすでに生活によつて自分の正規な地位から弾き出され、プロレタリアートの側に移つてくるところのインテリゲンチヤについて語るときには、このインテリゲンチヤをプロレタリアートに對置するのは全く馬鹿げてゐる。現代社會のあらゆる他の階級と同様にプロレタリアートも、單に自分固有のインテリゲンチヤを造り上げるのみでなく、またありとあらゆる教養ある人々の間から自分の味方をも獲得するのである。」——これは一九〇二年にレーニンが語つた言葉である(註)。

(註) 「×××アヴァンチユリズム」

スターリンはソヴェート聯邦におけるインテリゲンチヤの意義について、「如何なる治者階級も自分自身のインテリゲンチヤなしには濟まされない。ソヴェート聯邦の労働者階級もまた自分自身の生産技術家的インテリゲンチヤなしにはやつて行けないといふことを疑ふ何らの根據もない」と述べてゐる(註)。

(註) 「經營役員會議における演説」(一九三一年)

わが國では嘗つて労働者運動におけるインテリゲンチヤの役割について議論されたことがあり、サンヂカリストはインテリゲンチヤ排撃に傾いたことがある。これは、労働者階級はそれ自身の手で解放さるべきだといふ正しい原則に立脚しながらも、インテリゲンチヤをば一概にプロレタリアートに對置する誤謬を犯したことから生じた結果である。もちろん、ブルジョア的乃至小ブルジョア的な過去又は生活事情の影響から抜け切らないで労働者運動に参加するインテリゲンチヤに對しては一定の警戒が必要であらう。だがそれはインテリゲンチヤが本來的に非プロレタリア的だといふことを意味しない。労働者運動に理論を與へたものはマルクス、エンゲルスの如きインテリゲンチヤ、しかもブルジョア的出身のインテリゲンチヤだつたといふことを知るべきである。

最近、インテリゲンチヤの憂鬱とかいふことが云はれたが、これも何らインテリゲンチヤに特有のものではない。ファッションズの擡頭につれて、ブルジョアジーの自由主義的分派やプロレタリアートの上に何らかの程度に重壓がのしかかると共に、これらの階級分派又は階級に層してゐたインテリゲンチヤ、特にイデオローグの或る部分は煩悶を感じ、轉向したり、沈黙したり、又はそのどちらも出來ずに一層煩悶を深めたりするのである。特に日本ではプロレタリアートに引き寄せられてゐた多くの小ブルジョア・インテリゲンチヤがファッションズの擡頭と共にプロレタリアートを離れて元の階級的故郷へ歸つて行かうとする運動が、この一、二年來顯著である。そしてこの運動のスローガンとして「文學」への熱情とか、「自我」への沈潜とかいふブルジョア的、觀念論的な、あり來りのフレーゼが持ち出されてゐるのである。勿論、しかし、これらのインテリゲンチヤのみを責めるには及ばない。

**階級脱
落分子**

以上あげた、ブルジョアジー、地主、都市小ブルジョアジー、農民、プロレタリアートおよびこれらの階級の各々に配屬されるものとしてのインテリゲンチヤの外に、資本主義社會にはなほルムペン・プロレタリアートと呼ばれる階級脱落分子が、即ちどの階級にも所屬せず、さうかといつて何らの全一的なものをも形成せず、社會生活において何らの積極的役割をも演じない要素が存在する。階級社會には乞食、賣笑婦、浮浪人、常習的犯罪者等のやうな階級脱落分子はつねに存在するが、しかしそれもやはり歴史的に種々の異つた形態をとる。ルムペン・プロレタリアートとは、生産手段を所有せず、物質的および精神的の一切の労働から游離し、しかも労働能力をも喪失してゐる分子のことである。従つて單なる失業者や貧民はルムペン・プロレタリアートとは云はれない。しかし乍ら資本主義にとつて特徴的なのは、主として労働者の失業と小ブルジョアジーの貧困化がルムペン・プロレタリアートの源泉になるといふことである。

かかる脱落分子は社會發展にとつて何ら積極的な意義を有せず、彼等がプロレタリアートや農民の運動に参加するときには往々にして運動にとつてマイナスにさへなることは、エンゲルスがすでにドイツ農民戰爭について指摘した通りである。彼等が屢々、反動のデマゴグに日當で雇はれて、ストライキの打ちこわしや労働組合へのなぐり込みをやつたりすることは今日誰でも見聞するところである。ルムペン・プロレタリアートの一掃は、その發生と存続の社會的條件が現存する間は、如何に社會事業や慈善團體の活動がなされたにしても不可能である。

ソヴェート聯邦
における諸階級

現代社會における階級について語るに當つては、現代において一つの特殊な地位を占めてゐるソヴェート聯邦の階級關係をも問題にすることが必要となる。そしてこれは種々の意味で極めて興味深いテーマであるが、先きに社會經濟的構成について述べた場合と同様に、ここでも若干の圖式的な概略をもつて満足しなければならぬ。

「十月」から國民經濟の復興期を含むまでの時代の階級關係は、大體次の如くである。

- (1) 基本的階級——プロレタリアート
- (2) 基本的階級——中農
- (3) 副次的階級——殘存舊ブルジョアジー、ネツプマン、クラーク
- (4) 副次的階級——貧農（農村半プロレタリアート）

これで分るやうに、ソヴェート聯邦はその當初において、決して舊時代の階級を消滅せしめたのでなく、舊時代の階級は依然として殘存した。しかし乍らその相互の關係は従前とは正に反對となつた。そして過渡期の國家であり、エンゲルスの所謂「半國家」であるソヴェート聯邦においては、經濟の再建によるこれらすべての……—
—従つてプロレタリアート自身の止揚も——社會發展の客觀的並びに主觀的な課題とされる。

ここでは……—は第一の基本的階級であり、それは貧農と提携して資本主義的要素（殘存ブルジョアジー、新經濟政策によつて發生したブルジョアジーたるネツプマン、農業ブルジョアジー・富農たるクラーク）……—
…、中農を指導することを自己の課題として立てなければならなかつた。ここではプロレタリアートと貧農は勿論、

中農との間にもアンタゴニズムは存在せず、アンタゴニズムはただプロレタリアートおよび貧農と資本主義的要素との間のみ現存する。

ところで中農なるものは、農業が高度に資本主義化してゐる國では、少數の農業ブルジョアジーと多數の農村プロレタリアートおよび半プロレタリアート（註）に分化してしまふものである。しかるにソヴェート聯邦において、中農がプロレタリアートに次いで（數の上では第一位だが）基本的階級であつたといふことは、次の二つの事情を含んでゐる。第一に、「十月」以前のロシヤの農業が未だ農奴制の殘存物のために資本主義的發展が低度であり、農民の階級的分化が前資本主義的階級としての農民を止揚する（農業ブルジョアジーと農業プロレタリアートへの分解によつて）に到るまでには未だ前途遼遠であつたといふこと、前資本主義的農業關係の清算の上に立つソヴェート秩序の下では農民の分化は抑制され、それ故に中農は消滅せずして却つて基本的階級として存続したといふこと、——この二つの事情が、基本的階級としての中農といふ規定の中に含まれてゐるのである。そこで、ソヴェート秩序の下ではブルジョア・デモクラシーの徹底にも拘はらず、何故に農業の資本主義的發展が阻止され得るかを考へて見る必要がある。經濟の自生的運動、自然流動に任せて置くならば、小商品生産、小經營は必然的に資本主義を生まざるを得ないから、中農の階級的分化の傾向が存在することは説明するまでもない。ところが………、

政府の側から、資本主義的要素の生長が制限され、排除され、同時にクラークに對してアンタゴニズムにある貧農への援助がなされることによつて、農民の基本的大衆の零落が抑制され、従つて中農の分化が阻止され得るし、また實際に阻止された。だからいはゆる全域的コルホズ化の時代（それは第一次五ヶ年計畫の過程において到來した）が始

まるまでは、中農は依然として農村における主役者として存続した。一言でいへば、そこでは、貧農とクラークといふ兩極の生長による中農の解消といふ過程の中に表現される資本主義型の發展と反對に、中農の富裕部分のクラーク化によるクラーク群の若干の生長と、貧農の若干部分のプロレタリア化およびより多くの部分の漸次的中農化による貧農グループの減少といふ條件の下での、中農グループの強化の過程が見られたのである。

(註) 貧農を半プロレタリアと云ふのは、彼が一部分は自己の營む農業によつて、一部分は賃銀労働によつて生計を立てるが故である。

だが各々の中農が小經營者・小商品生産者として止まつてゐる間は、農業の資本主義的發展の可能性、傾向は決して始末されたのではない。これを始末するにはなほ、第一に、プロレタリアートが中農をコルホズに自發的に加入せしめ、コルホズ化のために中農と提携し、後者を指導し、同時に貧農に依據してクラークを制壓し、中農に對するクラークの影響、誘惑を終熄せしめ、クラークそのものをも………ことが重要となる。第二に、コルホズの技術的基礎を造出することによつて、小經營的農具の持ち寄りの下で可能となつたコルホズを一層強固ならしめること、コルホズを大工業の基礎の上に置き、その「マニユファクチュア時代」から脱却せしめることが必要である。機械・トラクター・ステーション網の設定、緻密化の課題はここから生れてくる。このやうに、コルホズ化は國家の側からの指導なしに自然流動的には成就されないものである。だがさうかといつて、威嚇や強制や命令は中農をプロレタリアートから離すだけであつて、何らの建設的な効果をも與へない。従つて農業コルホズ化のためには、コルホズの方が分散的小生産よりも各農民にとつてより有利であるといふことを中農に了解させ、奨勵と援助とによつて彼等を自發的

にコルホズに参加せしめ、その積極的な一員たらしめることが必要であつた。

第一次五ヶ年計畫と共に活潑化したコルホズ化は同時に階級としてのクラーク……課題を立て、従つてその進行は階級關係に重大な變動をもたらしめた。第一に、コルホズ農民は小生産者たる中農や貧農でなくなつて、それと質的に異つたものとなつた。コルホズ農民は新たななるクラスへと生長したのでなく、むしろクラスそのものの解消に向つて進み、ソシヤリズム社會の構成要素に發展したものである。だからコルホズ農民は孤立的農民の如くプロレタリアートの單なる提携者ではなくて、農村におけるソヴェート聯邦の眞實の支柱である。第二に、クラークの……第一次五ヶ年計畫の四ヶ年での完成と共に殆ど終結した。

ところで、農村におけるこのやうな過程の進行は、國の工業化、國民經濟の再建を通してプロレタリアートの比重が増大し、都市における資本主義的要素も……といふ條件の下で初めて可能であつた。第一次五ヶ年計畫の時代にソシヤリズムへの進入が始まり、その經濟の土臺が建造されたといふことも、このやうな事情との聯關において理解さるべきである。

現在進行中の第二次五ヶ年計畫においては、更に進んで「資本主義的要素およびクラス一般」の「……」、都市と農村の對立（この對立は都市の發生と共に始まる）の止揚のための前提の造出、技術の一層の前進（ヨーロッパにおける最も進んだ技術の國にすること）、民族共和國の後進性の終焉、ソヴェートコルホズ商業の發展を基礎としての勤勞者の福祉の増大と文化的向上、プロレタリアートの力の一層の生長等が目標とされてゐる（註）。

（註） A・ロマーキン「ソヴェート聯邦の歴史の主要段階について」（「コム・アカデミー通報」一九三四年第五〇六號所載）。

因にこの論文はソ聯邦の經濟的および政治的發展の各段階の區分とその特徴付けに關して、最もよくまとまつた研究である。
本書二六七頁にあげた段階區分もこれに依つた。

第五節 國家

國家の起源については、先きに紹介した階級形成の二つの經路に關するエンゲルスの見解によつて明白であらう。
ただその場合、國家は階級と同時に發生するのでなく、階級關係の一定の成熟段階において、かかる關係の維持のオ
ルガンとして初めて國家として成立した、といふことを念頭に置くべきである。

そこで、國家は社會經濟的構成の内部の階級的アンタゴニズムの自己疎外としては、一つの上層建築であることが
分る。だからそれはアンタゴニスティッシュな生産關係によつて規定され、それを反映するものであり、その限り歴
史的な現象である。あらゆる國家は、アンタゴニズムをもつて貫かれ、その自己疎外であるといふ一般の性質を、歴
史的に特殊な形態において、その本質として内包するものである。

かやうな見地からは、社會と國家を同一視したり、「國家は倫理的理念の現實態である」(ヘーゲル)などと主張す
ることは許されない。

エンゲルスによれば、國家の特徴は、血縁による組織でなくて地域による組織であること、その維持のために租稅

を必要とするところの公的權力を持つことである。

古代國家は奴隸主の國家であり、封建國家は領主・地主の國家であつた。奴隸や農奴は國家活動への參與を許されなかつた。公的權力は却つてかかる人民に對するものとして存在し、維持された。近代國家においては人民は選舉制によつて政治に参加するが、この参加たるや……、それをブルジョア的と呼ぶことに不思議はない。だから……ゲヴァルトに求めたカウツキーが、それにもかかはらずデモクラシー國家は「その傾向上……人民の多數者のオルガン」であるといふ理由で、その讚美者としてあらはれ、またクノウが國家の超歴史性を主張するのは、ファシスト政權のための地ならしをしたドイツ社會民主黨の實踐に照應するものではあつても、國家の唯物史觀的な把握でないことは明瞭である。今では彼等のデモクラシー國家の幻想は破綻し、……問題がアクチュアルなものとなつてゐる。ところでファシスト國家は、「ドイツやイタリーの例が示すやうに、近代デモクラシー國家と本質上異なるものでなく、ただ後者において比較的に隠蔽されてゐる本質がより公然と露呈されてゐるものにすぎない。

國家に關しては、その發生、本質、歴史的變遷、近代國家、アブソリュチズム、ボナパルチズム、デモクラシーとファシズム、ソヴェート國家等々といふテーマについて、正確な理解を持つべきであり、またさうでなければ特に今日の政治的生活を唯物史觀の見地から具體的に把握することは不可能でさへある。だがここではたださういふことを指示するだけで、準備がないために、これらのテーマに立ち入ることは出来ない。

なほ、近代國家は民族を單位としてゐる關係上、國家の問題に關聯して民族の問題が提起される。ここでは、民

族（又は國民）は血縁による結合ではなく（氏族や種族と異つて）、國家と同じく地域的結合であること、近代民族國家の形成は商品生産の發展による市場の擴大に制約される封建的割據の解體によつて行はれたこと、民族主義はかかる割據制の打破、ブルジョア國家の創始をその課題とする段階においては進歩的であり、イムピリアリズムのイデオロギー的旗幟となる段階においては反動的であること、他國のイムピリアリズムの羈絆から抜け出ようとする民族の民族主義は進歩的意義を有し、且つそれはすべての社會運動と同様に民衆の手において初めて眞に進歩性を發揮すること、等々を解明することが必要となる。だがこれも本書のプランの範圍外に屬するものだといふことを御斷りしなければならぬ。

— 終 —

昭和拾年拾月拾九日 印刷
昭和拾年拾月拾九日 發行

著

者

檢

印

唯物史觀講話

定價 金壹圓參拾錢

著者

永田 廣志

發行者

東京市神田區美土代町四

中村 德二郎

印刷者

東京市麴町區土手三番町二九

谷口 熊之助

發行所

東京市神田區美土代町四

白揚社

振替東京二五四〇〇番
電話神田(25)二二八五番

唯

物辯證法講話

菊版假裝三五〇頁
定價金壹圓參拾錢

永田廣志著

戸坂潤氏の批評の一節 マルクス主義哲學或ひはもつと正確にいふならば唯物辯證法を、もつとも入り易い形で與へて呉れる本はないか、とよく私は色々の人から尋ねられる。しかしこれは中々簡単に答へることの出来ない質問なのである。……最近特にかういふ要求に答へるために、少なからぬ人達が色々の唯物辯證法の讀本を發表した。代表的なものとしては大森義太郎氏の「唯物辯證法讀本」と徳永直、渡邊順三兩氏の「辯證法讀本」とを舉げることが出来ると思ふが、永田廣志氏の「唯物辯證法講話」は、これ等のものに比べて今いつた點でズツト立ち勝つたものだと斷言出来るのではないかと思ふ。……もつとも便利な信賴出来る又甚だ興味に富んだ書物として、單に初學者の入門書としてばかりではなく、専門家の研究整理用の参考書としても、私はこの本を勧めることが出来る。(九・二・二六日、東朝より)

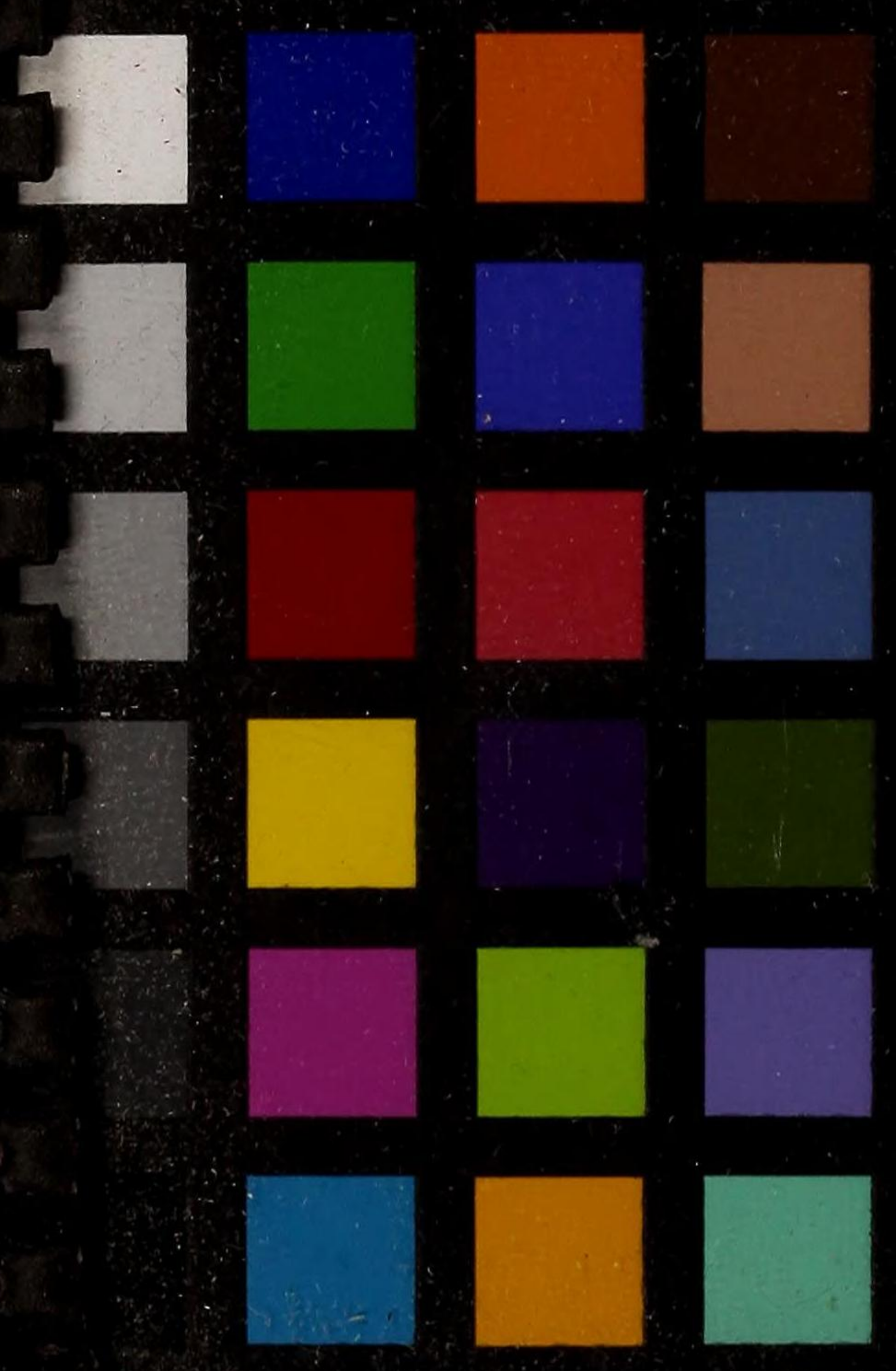
哲學に於ける二大方向、形而上學的唯物論と主觀的觀念論、カントとヘーゲル、フオイエルパツハ主義、辯證法的唯物論の一般的特徴、哲學的科學としての唯物辯證法、唯物辯證法の根本法則、形式論理學、概念論、辯證法の諸要素、レーニンと辯證法的唯物論、參考書等々

LC ACQUISITIONS



0 030 471 660 5

LC ACQUISITION
030 471



Japan
2/14/13
122

yui but sushi kank 008800
00304716605

